


英語教育中核教員育成研修

令和5年度
授業改善
プロジェクト
報告書



アクション・リサーチによる
高等学校英語授業での実践研究

目 次

英語教育中核教員育成研修とは	1
「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト	3
「聞くこと」に関わる指導	
概要と要点把握を促すリスニング指導	5
生徒の自信を引き出すリスニング指導	9
生徒の意欲を引き出し、要点を聞き取る力を伸ばすリスニング指導	13
概要や要点を聞き取るためのリスニング指導	17
「読むこと」に関わる指導	
概要や要点を的確に理解する力を身に付けさせるリーディング指導	21
自信をもって英文を読む姿勢を身に付けさせる指導	25
「話すこと【やり取り】」に関わる指導	
実践的コミュニケーションに結び付くスピーキング指導	29
即興で論理的に意見のやり取りをする力を伸ばす指導	33
自信をもって論理的に話す力を育てる指導	37
自信をもって正確にやり取りする力を育てるスピーキング指導	41
文法的正確性を高め、自信を付けるスピーキング指導	45
自信をもって英語でやり取りする力を伸ばすためのスピーキング指導	49
「話すこと【発表】」に関わる指導	
論理的に自分の意見を伝えるスピーキング指導	53
I C T機器を活用しながら英語で発表する力を養う指導	57
自分の意見を即興で話す力を育てるスピーキング指導	61
「書くこと」に関わる指導	
自分の言葉で要約するためのライティング指導	65

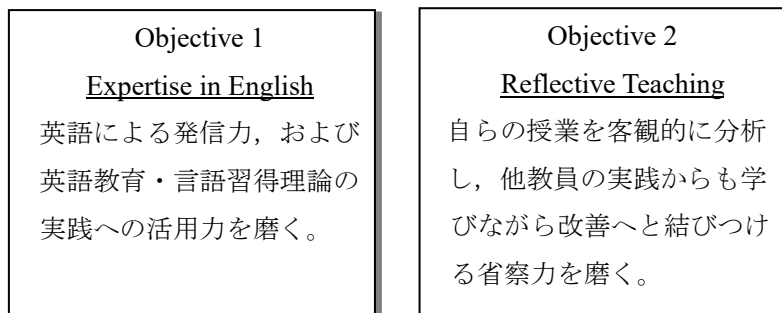
*それぞれの実践レポートの内容については、言語活動の呼称などに関し、厳密な用語の統一はしていません。

英語教育中核教員育成研修とは

○ 英語教育中核教員育成研修のねらい

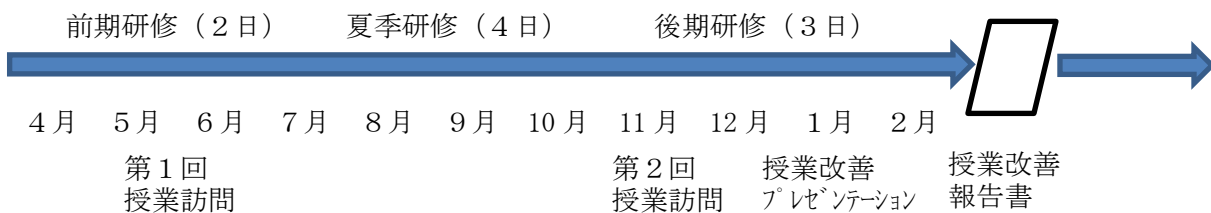
英語教育中核教員育成研修は、神奈川県で中核的役割を担う高等学校外国語科の教師に専門性の高い研修の機会を提供することを目指し、国際言語文化アカデミアが県教育委員会との連携のもと実施してきた「英語教育アドヴァンスト研修（平成23年～令和2年）」の内容に基づき、令和3年度から総合教育センターにおいて開講されました。

集合研修9日（前期2日、夏季4日、後期3日）、勤務校での授業研究2日（前期・後期各半日、研修担当者訪問）から構成される合計11日間のプログラムは、「英語教師の専門知識、英語による発信力」「授業研究、授業改善」を2つの大きな柱としています。



○ 研修成果を生かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのより良い生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし、教師であれば授業改善の複雑さ・難しさは身をもって経験しています。そこで中核教員育成研修では、集合研修において英語力、英語教育に関する専門知識を高めながら、勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は三つあります。第一に、研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に、報告書の内容を他の外国語科教員と共有することで、授業改善に関するアイデア創出に資すること。第三に、高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を発信することで、英語教育や教師の人材育成にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針を御理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について、読者に参考となる情報を個人情報保護に留意して記述する。
3. 実践報告については、理想論にとらわれず、現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者に分かるように記述する。
5. データ処理や分析については、統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れ、授業改善の手だての効果を記述する。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりを改めて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するという体験をします。

2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の1つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に多くの時間を費やしてしまい、生徒に自己表現をあまりさせていない。

教科書英文の読解活動には取り組むが、初見の英文に対応できる読解力が育っていない。

3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを1つまたは2つ選びます。

4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

5. 改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」及び「改善の目安(数値目標)」として明確に言語化します。

6. 目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) プレリーディング活動を工夫すれば、興味や背景知識が活性化され、主体的に読解に取り組むようになるだろう。

7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさがありますが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をともなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ教師達が、仲間を増やししながら、より良い授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

○ 過去のテーマ分類

国際言語文化アカデミアにおける「英語教育アドヴァンスト研修」を含めた、過去の受講者が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると、次の表のようになります。平成26年度までは、「動機づけ・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが、平成27年度からは、『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し、4技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
聞くこと	0	1	0	0	1	1	2	2	2	0
話すこと	2	1	2	7	9	4	7	3	7	4
読むこと	5	4	4	6	11	8	6	6	4	4
書くこと	4	4	3	3	4	2	0	4	2	1
動機づけ・学習意欲	6	3	1	5	—	—	—	—	—	—
語彙・文法	3	1	2	3	—	—	—	—	—	—
計	20	14	13	25	25	15	15	15	15	9

*1：「技能統合型」

	R3	R4	R5
聞くこと	4	1	4
読むこと	5	3	2
話すこと【やり取り】	8	2	6
話すこと【発表】	4	1	3
書くこと	3	3	1
計	24	10	16

※R3年度より、話すこと【やり取り】【発表】の領域を設定し、掲載をLRSWの順としています。

概要と要点把握を促すリスニング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	-----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス 120名（男子 72名、女子 48名）の生徒である。ほぼすべての生徒が大学進学を希望し、過半数が難関大学を目指している。ほとんどの生徒が授業や課題に真面目に取り組む。

解決すべき課題

生徒たちの多くは単語や文法に関して中学時代から意欲的に学習してきており、長文読解にも比較的自信をもっていると思われる。一方、リスニングやスピーキングの技能においてはその必要性を感じながらも、自信をもつことができない生徒が多いようである。リスニングの学習方法を確立させ、生徒が自信をもって概要や要点を聞き取れるように指導したい。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- 第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数 120）

- この授業で特にどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（複数回答可）

聞く力	読む力	話す力	書く力
89人(74.2%)	48人(40.0%)	96人(80.0%)	47人(39.2%)

- 英語を聞く力はこれからの生活の中で必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
95人(79.2%)	23人(19.2%)	2人(1.7%)	0人(0.0%)

- あなたは英語を聞くことに自信がありますか。

かなり自信がある	まあまあ自信がある	あまり自信がない	自信がない
2人(1.7%)	28人(23.3%)	69人(57.5%)	21人(17.5%)

- 先生が英語の授業を英語ですることについてどう思いますか。

英語で授業をしてほしい	どちらかといえば 英語で授業をしてほしい	どちらかといえば 日本語で授業をしてほしい	日本語で授業をしてほ しい
30人(25.0%)	54人(45.0%)	34人(28.3%)	2人(1.7%)

<分析と考察>

アンケートの結果から、授業を通して英語を「話す力」と「聞く力」を伸ばしたいと考えている生徒の割合が多いことが分かった。また、98.3%の生徒が「英語を聞く力はこれからの生活で必要だ」と「思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答している。一方、英語を聞くことに「あまり自信がない」「自信がない」と回答した生徒が合わせて75%おり、生徒が自信をもって聞けるように指導する必要があると感じた。また、先生に「英語で授業をしてほしい」「どちらかといえば英語で授業をしてほしい」生徒が合わせて70%おり、録音された英語の音声を教材として用いるだけでなく、教員の生の声でリスニングに慣れさせることができる素地があると感じた。

・ 第1回リスニングテスト（6月実施：受験者数113）

まとまりのある英文の概要や要点を聞き取る力がどれくらい身に付いているのか調べるために、英検2級のリスニング問題の第1部と第2部から15問ずつ、計30問を出題した（30点満点）。

平均得点率 (平均点)	標準偏差	最高点	最低点	7割以上正解 した生徒数 (21点以上)	5割以下正解 した生徒数 (15点以下)
59.3%(17.8)	5.1	27	5	42人(37.2%)	42人(37.2%)

<分析と考察>

高校卒業程度が目安とされている英検2級のリスニング問題での平均得点率が59.3%と、高校1年生の6月としてはかなり高い数値が出た。しかし7割以上正解した生徒の割合が37.2%である一方、得点率が5割以下の生徒の割合も37.2%を占めており、習熟度に差があることが明らかになった。

リサーチ・クエスチョン

生徒が自信をもって概要や要点を聞き取れるようにする力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・英検2級のリスニング問題で平均得点率が70%以上になる。
 - ・アンケートで英語を聞くことに「かなり自信がある」「まあまあ自信がある」と回答する生徒が全体の70%以上になる。
 - ・アンケートで先生に「英語で授業をしてほしい」「どちらかといえば英語で授業をしてほしい」と回答する生徒が全体の80%以上になる。

改善のための手立て

- 明示的な音声指導を行えば、生徒自身が英語を聞き取れるようになるだろう。
 - ・ 英語特有の音声を指導し、それを意識しながら音読をさせる。
 - ・ 教科書、副教材を使用し定期的に発音（リズム等を含む）指導をする。
- リスニング活動の工夫を行えば、概要や要点を聞き取れるようになるだろう。

- ・ プレリスニング活動として、生徒のスキーマを活性化させるために「何を聞き取るのか」という目的（概要・要点）を提示する。
- ・ ポストリスニング活動として、どこでつまづいたのか振り返りを行わせる。

○ 英語を日常的に聞く機会を増やせば、聞くことに慣れて正確に聞き取れるようになるだろう。

- ・ 文法説明等必要な場合を除き、英語で授業を行う。
- ・ 生徒のリスニングレベルに合わせ、教員は常に生徒に分かりやすい英語の発話を心掛ける。
- ・ リスニングの勉強方法と自学用の教材を共有し、生徒がリスニングを自学できるよう支援する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・ 第2回英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数116）

1. あなたは英語を聞くことに自信がありますか。

かなり自信がある	まあまあ自信がある	あまり自信がない	自信がない
4人(3.4%)	29人(25.0%)	57人(49.1%)	26人(22.4%)

2. 先生が英語の授業を英語ですることについてどう思いますか。

英語で授業をしてほしい	どちらかといえば英語で授業をしてほしい	どちらかといえば日本語で授業をしてほしい	日本語で授業をしてほしい
35人(30.2%)	50人(43.1%)	28人(24.1%)	3人(2.6%)

3. 長めの英文を聞く際に以前より概要や要点をつかむことができるようになったと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
11人(9.5%)	87人(75.0%)	15人(12.9%)	3人(2.6%)

4. リスニングの勉強方法が以前より分かるようになりましたか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
14人(12.1%)	73人(62.9%)	25人(21.6%)	4人(3.4%)

<分析と考察>

英語を聞くことに「かなり自信がある」「まあまあ自信がある」と回答した生徒の数は、第1回アンケートの25.0%から28.4%へと微増にとどまった。先生に「英語で授業をしてほしい」「どちらかといえば英語で授業をしてほしい」生徒も70.0%から73.3%と微増にとどまり、両項目とも改善の目安を達成することはできなかった。一方で「以前よりも概要や要点をつかむことができるようになった」生徒の割合は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて84.5%に達し、「リスニングの勉強方法が以前より分かるようになった」生徒の割合も「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて75.0%に達した。目標を達成することはできなかったが、指導に一定の効果があったと感じた。

・ 第2回リスニングテスト（12月実施：受験者数100）（30点満点）

平均得点率 (平均点)	標準偏差	最高点	最低点	7割以上正解 した生徒数 (21点以上)	5割以下正解 した生徒数 (15点以下)
64.3%(19.3)	4.7	29	9	40人(40.0%)	24人(24.0%)

<分析と考察>

平均得点率は、改善の目安とした70%には届かなかったものの、第1回の59.3%から64.3%まで上昇した。事前・事後のデータが揃った95名の得点についてt検定を行ったところ、統計学的に有意な伸びが認められた ($p = 0.00 < 0.05$)。また、5割以下正解した生徒の割合が37.2%から24.0%に減少した。目標には届かなかったが、聞く力の向上を目指した一連の手立てに、一定の効果があったと言ってよいだろう。

教師の変化

生徒の実態を把握することの重要性を認識した。生徒が英語の授業についてどのような要望を持っているか、英検のリスニングセクションで何点取ることができるかを正確に把握することによって、生徒の実態に応じた授業づくりができた。また、様々なリスニングの指導法について学ぶこともできた。経験を通して授業をするだけでなく、理論とデータに基づいて授業計画を立てることで自信をもって授業が行えた。それに加えて、自身が英語で話す内容の整理を授業前に時間をかけて行うことにより、生徒に分かりやすい英語の発話が昨年度までよりもできるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回は改善のための手立てが多岐に渡り、何がどのように効果的だったのかを把握することができなかった。次回以降はある程度手立てをしぼって行い、有効性を検証したい。授業アンケートでは「話す力」を伸ばしたい生徒が最も多かったため、来年度は「話す力」を向上させる指導を中心に組みみたい。

まとめ・感想

1年間授業改善に意欲的に取り組むことができた。「聞く力」「話す力」を伸ばすための時間を授業に取り入れ、4技能をバランス良く教えられるようになったと感じる。このような機会を与えていただき指導をしてくださった先生方に感謝する。これからも生徒のために自己研鑽に励みたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

鈴木寿一・門田修平(編著). (2018). 『英語リスニング指導ハンドブック』大修館書店.
 白井恭弘. (2012). 『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店.
 Brown, S. & Larson-Hall, J. (2012). *Second Language Acquisition Myths*. University of Michigan Press.

生徒の自信を引き出すリスニング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・ 習熟度 ・小集団
-----	---------------	----	---	----	---------------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス 62名（男子 29名、女子 33名）の生徒である。中学校までの基本的な語彙や文法知識が概ね定着しており、学習意欲が高く授業に積極的に参加する生徒がほとんどである。例年、約8割の生徒が4年制大学へ進学しており、学校推薦型選抜や総合型選抜で受験する生徒と一般受験する生徒がだいたい半々である。

解決すべき課題

英語の授業に意欲的に取り組み、コミュニケーション活動などに積極的に参加する生徒が多いが、会話を続ける際に英語が聞き取れないことが課題となっている。特に、ネイティブの話す英語や、スピードが速い英語の聞き取りに苦手意識をもつ生徒が多いように見受けられる。また、試験のリスニングならできるが、実際のコミュニケーションになると自信がもてないという生徒も多い。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回リスニングテスト（5月実施：受験者数 60）

英検2級リスニングテスト第2部（内容一致、選択問題 15問、15点満点）

まとまりのあるパッセージを聞き、内容に関する質問に答える形式の問題である。問題用紙には回答の選択肢のみが記載しており、質問文はパッセージの最後に読まれる。

平均点	最高点	最低点	中央値	標準偏差	得点7点以下	得点9点以上
7.5	15	2	7	3.26	36人(60.0%)	23人(38.3%)

人数分布

点数	0～3	4～7	8～11	12～15
人数	6人(10.0%)	30人(50.0%)	16人(26.7%)	8人(13.3%)

<分析と考察>

38.3%の生徒が9点以上得点した一方で、得点が7点以下の生徒が全体の60.0%であった。身近な生活に関する話（足を怪我した話、鍵をなくした話、夜の予定についての話等）を聞き取る問題では正解率が高い傾向にあったのに対し、馴染みのないトピック（銀行で貯蓄の相談・ボタンの歴史・ドールハウス）や答えに関わる情報が後半の方に出てくる問題、選択肢が長い問題で正解率が低い傾向にあった。これはまとまりのあるパッセージに対して、語彙・音声・背景知識の不足などにより情報処理をすばやく行うことが難しかったことが原因と考えられる。76.7%が第2四分位、第3四分位の層に収まっており、分散は大きくない。

・第1回アンケート調査（5月実施：回答者数62）

1. 英語を聞くことが好きである。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば好きではない	好きではない
18人(29.0%)	27人(43.5%)	15人(24.2%)	2人(3.2%)

2. 英語を聞くことに自信がある。

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
5人(8.1%)	12人(19.4%)	26人(41.9%)	19人(30.6%)

<分析と考察>

英語を聞くことが「好き」または「どちらかといえば好き」と答えた生徒の割合は72.6%に上るのに対し、英語を聞くことに「自信がある」「どちらかといえば自信がある」と答えた生徒の割合は27.4%であった。リスニングに対して前向きな感情を持っているにもかかわらず、自信がもてていない生徒が多いため、力を伸ばしていくとともに、リスニングへの取り組み方を指導し、自信をもって自ら英語を聞こうとする態度を育成する必要がある。

リサーチ・クエスチョン

自信をもってリスニングに取り組み、まとまりのある文章の要点を理解できる力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英検2級リスニング第2部の問題（1点×15問）で6割（9点）以上得点する生徒の割合が全体の7割以上になる。

・アンケートで、英語のリスニングに「自信がある」「どちらかといえば自信がある」と回答する生徒の割合が全体の6割以上になる。

改善のための手立て

- まとまりのある文章を聞くリスニングタスクを継続的に行えば、注意を向けるべきポイントが分かり、よりの確に文章の大意を理解することができるようになるだろう。
 - ・リスニング教材を使用し、継続的に様々な題材のリスニングをする機会を作る。
 - ・Elllo.orgやBritish Councilの教材を週末課題として課し、よりナチュラルな会話の中での英語の音声に慣れさせる。
 - ・簡単なタスクを与え、教科書の本文を聞く活動を毎時間行う。
- 英語の音声について明示的な指導を行えば、英語特有の音声聞き取れるようになり、音声情報を処理する速度が上がるだろう。
 - ・ディクテーションを行い、文字と音を結びつける活動を行う。
 - ・英語特有の音声（連結・同化・脱落・フラップT・弱音化）について明示的に説明する。
 - ・音読練習の前に音声を聞き、音声変化がどこで起こっているかを書きとらせ、それを意識させながら音読活動を行う。
 - ・新出単語を確認する際、発音記号を意識させながら発音指導を行う。

○ リスニングストラテジー指導を明示的に行えば、自分のリスニング学習と熟達度を振り返ることができ、リスニングに対して自信をもつことができるだろう。

- ・内容が馴染みのないトピックのリスニングを行う時は、事前に関連する単語や背景知識をクラスで共有しスキーマの活性化を図る。
- ・リスニング問題の振り返りを行い、なぜ解けなかったのかについて分析するよう指導を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回リスニングテスト（11月実施：受験者数55）

英検2級リスニングテスト第2部（文の内容一致、選択問題15問、15点満点）

平均点	最高点	最低点	中央値	標準偏差	得点7点以下	得点9点以上
8.7	15	0	9	3.63	22人(40.0%)	28人(50.9%)

人数分布

点数	0～3	4～7	8～11	12～15
人数	4人(7.3%)	18人(32.7%)	22人(40.0%)	11人(20.0%)

<分析と考察>

第2回リスニングテストでは、9点以上を取った生徒の割合は全体の50.9%にとどまり、改善の目安には到達しなかったが、平均点が1.2点、中央値も2点上昇し指導の効果を実感できる結果となった。生徒の伸びについてt検定（対応のあるデータ）を行ったところ、有意差が認められた（ $p = 0.03 < 0.05$ ）。得点が7点以下の生徒が第1回（60.0%）と比較し、20ポイント減少し40.0%となったことが、平均点の上昇につながったと考えられる。

正解率が低い問題の中に、綿（cotton）の普及について扱っているトピックがあった。「コットン」は日本語でも使用されるなじみのある単語であるが、“cotton”や“button”、“mountain”等に見られる/t/の音を飲み込んだ「ン」の音で発音する「飲み込みのT」の音声理解の妨げとなったことが推測されるため、引き続き音声変化の明示的指導を行う必要がある。

・第2回アンケート（12月実施：回答者数56）

1. 英語を聞くことが好きである。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば好きではない	好きではない
25人(44.6%)	18人(32.1%)	8人(14.3%)	5人(8.9%)

2. 英語を聞くことに自信がある。

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
10人(17.9%)	14人(25.0%)	19人(33.9%)	13人(23.2%)

3. 授業を通して英語の音声変化に対する意識は変化しましたか。

変わった	変わらなかった
47人(83.9%)	9人(16.1%)

<分析と考察>

英語を聞くことに「自信がある」「どちらかといえば自信がある」と答えた生徒の割合は全体の42.9%と、改善の目安である6割には到達しなかったが、第1回(27.4%)と比べ15.5ポイント上昇し、リスニング力に自信をもつ生徒が増えた。目標に到達しなかった原因として、生徒のリスニング力の向上とともに使用している教材の難易度も上がっていき、「リスニングができる」と実感する機会が少なかったことが推察される。

授業中の取組に関しては、83.9%の生徒が「英語の音声変化に対する意識が変わった」と回答しており、明示的な音声変化に関わる指導が効果的であったことと感じられた。

教師の変化

リスニング力を向上させるためには、付随する様々なサブスキルを身に付けさせる必要があるということが分かった。また、そのスキルを向上させるためにはどのような活動をすればよいかと考えるようになり、授業内の活動の目的を意識して授業を作るようになった。またこの実践を通じて、第二言語習得の理論に基づいた効果的な授業改善をすることができたと実感したため、更なる授業力向上に努めたいと感じるようになった。

今後の課題(次の改善点など)

生徒の英語特有の音声変化に関する基本的な理解は深められたが、実際の聞き取りの機会を十分に確保することはできなかった。映画やYouTubeでのネイティブの会話の聞き取りなど、オーセンティック教材等を用いて、より実践的なリスニングスキルを伸ばしていけるような機会を増やしていきたい。また、リスニングに取り組む機会が授業だけであるという生徒も多かったため、リスニング学習を自主的に進められるような取組をしていきたい。

まとめ・感想

授業とリスニング指導に最も向き合った1年であった。これまでリスニングにつまずく原因は単純に英語を聞く機会が少ないからだろうと考えていたが、生徒は思っている以上に英語独特の音声変化や日本語の発音とのギャップに難しさを感じているということが分かった。聴解のプロセスについて理解を深め授業改善を行うことで、リスニングは効果的に指導することができるということを実感できた。また、生徒の興味を引き出すために教材研究を熱心に行うほどに、それが生徒にも伝わりより良い授業になっていくということを感じた。アクション・リサーチに取り組んだこの1年は、授業を一層楽しむことができた。今後も生徒にとって有意義な授業ができるように自己研鑽に励みたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

鈴木寿一・門田修平(編著). (2008). 『英語リスニング指導ハンドブック』大修館書店.
JACET SLA 研究会(編著). (2013). 『第二言語習得と英語科教育法』開拓社.

生徒の意欲を引き出し、要点を聞き取る力を伸ばすリスニング指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象となる生徒は2クラス34名（男子13名、女子21名）である。習熟度・小集団の授業を展開しており、対象は基礎クラスである。英語や学習全般に対して苦手意識を持ち、消極的な姿勢で授業に臨んでいる生徒も見られる。例年、進学を希望する生徒が多い。

解決すべき課題

授業に参加せずあきらめてしまう生徒が多数いる。特にリスニングについては苦手意識が強く、学習した内容が「分かった」と実感できる機会を増やすことが必要であると感じている。自信をもたせ、意欲を高め、要点を聞き取る力と授業に集中して取り組む力を養いたい。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回リスニングテスト（5月実施：受験者数27名）

英検3級レベルのリスニング問題（英文の内容と一致するものを選択する問題10問×1点）を使い、要点を把握する力を調べた。

平均点	7割以上正解(7~10点)
2.4点/10点	0人(0.0%)

<分析と考察>

平均点は2.4点であり、7割以上正解した生徒はいなかった。テストに際し、開始前から諦めて取り組まない様子、または2問目以降は解答をやめてしまう様子が生徒の多数に見られた。学びに積極的になるような手立てと、活動に取り組ませるための工夫が必要であると感じた。

- ・第1回アンケート調査（4月実施：回答者数34）

1. あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
0人(0%)	8人(23.5%)	9人(26.5%)	17人(50.0%)

2. あなたは英語の授業に積極的に参加していたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
5人(14.7%)	15人(44.1%)	8人(23.5%)	6人(17.6%)

3. 英語の授業内容はどれくらい理解できていると思いますか。

ほぼ全部できている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
0人(0%)	9人(26.5%)	17人(50.0%)	8人(23.5%)

4. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。(3つまで回答可)

英語を聞く力	英語を読む力	英語を書く力	英語を話す力	文法の知識
27人(79.4%)	16人(47.1%)	13人(38.2%)	22人(64.7%)	11人(32.4%)

5. 英語を聞く力はこれからの生活の中で必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
13人(38.2%)	14人(41.2%)	3人(8.8%)	4人(11.8%)

<分析と考察>

最初の英語の授業でアンケートを実施した。「英語が(どちらかといえば)嫌い」と答えた生徒が76.5%であり、苦手意識を持った生徒がとても多いことが分かった。授業については、「(どちらかといえば)積極的に参加していた」と約60%が回答したものの、内容の理解が「(ほとんど/あまり)できていない」と73.5%の生徒が回答していた。「英語を聞く力を伸ばしたい」と答えた生徒は27人(79.4%)で4技能中最も高く、これからの生活の中で「(どちらかといえば)英語を聞く力が必要だと思う」と27人(79.4%)の生徒が回答していた。リスニングを指導して、要点を聞き取る力を高めれば、授業に対する積極性が高まるのではないかと考えた。

リサーチ・クエスチョン

リスニングタスクに積極的に取り組み、要点を聞き取る力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・英検3級レベルのリスニング問題(10問×1点)の平均点が7割(7点)を超える。
 - ・アンケートで「英語の内容の6割以上が理解できた」と実感する生徒及び「英語の授業に(どちらかといえば)積極的に参加していた」と回答する生徒が全体の7割を超える。

改善のための手立て

- 支援を与えてリスニング練習を繰り返せば、より積極的にリスニングに取り組むようになるだろう。
 - ・「何を聞き取るのか」という目的(概要・要点・細部など)を事前に提示する。
 - ・空港、駅、レストランなどで使われる特有の表現を教える。
 - ・短い会話から始めて、内容理解のレベルを少しずつ上げていく。
 - ・会話のキーワードから想定される場面を考えられるよう指導する。
 - ・スクリプトの穴埋めをする。
- 明示的な音声指導をすれば、よりの確なリスニングができるようになるだろう。
 - ・教科書本文を発音に気を付けながら音読活動をさせ、生徒が「読める」、「知っている」と感じる単語を増やしていく。

- ・「単語の意味と発音が理解できると本文の概要をつかむことができる」と生徒に実感させる。
- ・学習したあと、スクリプトを見て聞き取れなかった単語や連結、脱落音についての解説など事後指導を行う。

○ オーセンティック教材を用いてリスニングをすれば、生徒が前向きに言語活動に取り組むようになるだろう。

- ・著名人のインタビュー、短い動画を教材として利用することで生徒に内容に対する親しみを持ってもらい、モチベーションを上げるきっかけにする。
- ・リスニングをさせる素材は、なるべく教科書本文で用いられている語彙等とつながりがあるものにする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回リスニングテスト（11月実施：受験者数24）

英検3級レベルのリスニング問題（英文の内容と一致するものを選択する問題（10問×1点））を使い、要点を把握する力を調べた。

平均点	7割以上正解(7~10点)
4.1点/10点	4人(16.7%)

<分析と考察>

平均点は4.1点と目標の7点には届かなかったが、第1回の2.4点から大幅に上昇し、7割以上正解した生徒は4人と、スコアに大きな改善が見られた。2回とも受験した生徒のデータの変化について検定を行ったところ、有意な向上が認められた($p = 0.02 < 0.05$)。また点数だけでなく、音声が行れる前から選択肢に目を通すなど聞く姿勢をとる生徒がいるなど、取組の様子にも大きな改善が見られた。

・第2回アンケート調査（12月実施：回答者数18）

1. あなたは英語の授業に積極的に参加していたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
4人(22.2%)	10人(55.6%)	2人(11.1%)	2人(11.1%)

2. 英語の授業内容はどれくらい理解できていると思いますか。

ほぼ全部できている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
0人(0%)	8人(44.4%)	6人(33.3%)	4人(22.2%)

3. リスニングの練習やテストを行った時、英語の内容はどの程度理解できましたか。

全て分かった	ほとんど分かった(8割以上)	まあまあ分かった(6-8割程度)	半分くらいは分かった(半分程度)	ほとんど分かっていなかった(2-4割程度)	全く分かっていなかった(0-1割程度)	6割以上理解できた
1人(5.6%)	6人(33.3%)	4人(22.2%)	3人(16.7%)	2人(11.1%)	2人(11.1%)	11人(61.1%)

<分析と考察>

「(どちらかといえば) 授業に積極的に参加していた」と回答した生徒が7割を大きく超え、目標を達成することができた。また授業内容の理解が「(ほとんど/あまり) できていない」と回答した生徒の割合は、73.5%から55.6%に減少した。一方、「リスニングで英語の内容の6割以上理解できた」と回答した生徒の割合は61.1%で、「7割以上」としていた改善の目安を達成することはできなかった。

教師の変化

どのようなアプローチをすれば生徒が授業に積極的に参加できるかを繰り返し考え、Chromebook を活用し、視覚教材や音声教材を使用するなどして、リスニング指導の工夫を重ねた。活動の目的を意識しながら教科書の内容とリンクしているリスニング教材を選び、繰り返すことで、要点を聞き取る力を身に付けさせられると考えたが、なかなかうまくいかなかった。生徒の反応を見て、教材を使用するタイミングを変えたり、生徒が興味を持つ素材に変更するなどしたところ、少しずつ生徒の小さな成長や変化が感じられる機会が増え、私自身も徐々に授業改善の手ごたえを感じられるようになった。

今後の課題 (次の改善点など)

単語レベルで「聞き取れる」「分かる」と実感できる機会を増やすだけでなく、今後はさらに、全体の概要を把握できるようになってほしいと考えている。リスニングに限らず、生徒の資質・能力を育成するためには、明確な目標設定と3年間継続した取組が重要である。今後は語彙を増やすことにもチャレンジし、生徒が「聞いたことがある」と感じる語を増やすことで、読む・書く・話す活動など他の技能を伸ばす学習につなげられるよう、4技能を結び付けた活動を実施していきたい。

まとめ・感想

リスニング活動に継続して取り組ませる、教科書本文と関連する活動を行わせるなど、英語で英語を理解する活動に、生徒と共に取り組み始められた気がしている。リサーチの中間段階においては、オーセンティック教材で生徒を惹きつけることができず、取組が重く感じられたこともあった。しかし、教科書本文の内容に焦点を当てたリスニング活動に切り替えた頃から、授業に前向きに取り組む、発音に注意しながら読む生徒が増え、音読活動においても変化が見られた。「発音できる」「分かる」語が増えることが、生徒の自信にもつながると実感することができた。生徒の様子を見ながら活動を考えたことで、これまで気付くことのできなかった変化が捉えられた。この研修での経験を基に、今後も同僚の教員と協力しながら授業改善を進めていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』大修館書店.

Rod Ellis. (1997) *Second Language Acquisition*. OXFORD UNIVERSITY PRESS.

MARY UNDERWOOD (1989) *Teaching Listening*. Longman Handbooks for Language Teachers:
Longman.

概要や要点を聞き取るためのリスニング指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス117名（男子79名、女子38名）の生徒である。例年、7割近い生徒が卒業後に就職する工業高校である。一方、4年制大学進学者はその大多数が推薦制度を利用し進学するため、一般選抜を利用したの大学進学者はほぼいない。どのクラスも明るく活気があり、授業に真面目に取り組み、発言も積極的である。

解決すべき課題

中学校の時に英語への苦手意識を持った生徒が多く、特に英語を聞き取ることへの自信のなさが見られる。日本語には存在しない英語の発音、プロソディー変化など音声全般への基礎知識が乏しいようで、英語の聞き取りに苦労している生徒が多い。また自身の授業では、英語を聞いて概要や要点を的確に把握する力を養うための指導や活動が十分に行えていない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート（4月実施：回答者数112）

1. あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
13人(11.6%)	48人(42.9%)	38人(33.9%)	13人(11.6%)

2. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（三つまで選択可能）

聞く力	読む力	話す力	書く力	単語や熟語	文法
75人(67.0%)	57人(50.9%)	63人(56.3%)	44人(39.3%)	17人(15.2%)	15人(13.4%)

3. 英語の勉強について、困っていることがあれば書いてください。（自由記述）

- 単語の発音とスペリングが一致していないため間違えやすい
- リスニングが苦手なので聞くべきポイントなど全部真面目に聞かなくても良いコツがあれば知りたい
- 単語と発音を一緒に覚えられない
- 正しい発音の仕方と覚えやすい方法を知りたい
- 初めて見る単語をなんとなくでも発音できる方法とか

<分析と考察>

「英語の学習が好き」と回答した生徒は、「どちらかといえば好き」と合わせると 61 人(54.5%)となり、予想以上に肯定的な回答が多かった。英語の授業で伸ばしたい力として、「聞く力」と回答した生徒が 75 人(67.0%)もいる一方、自由記述には英語の音の聞き取りに困難を感じている様子が見られた。

・第1回リスニングテスト（5月実施：受験者数 113）

問題：過去の英検準2級のリスニング問題を使用。第1部から第3部までそれぞれ3題ずつ出題し、1問1点計9点とした。第1部は会話の最後に対する応答として適切なものを選ぶ問題で、第2部は会話を聞いて、内容に関する質問に答える問題である。第3部はモノログ形式の短いパッセージの内容に関する質問に答える形式である。

結果（9点満点）：

平均点	5割（5点）以上
3.8	48人(42.5%)

各部ごとの平均点と0点の生徒の数（それぞれ3点満点）：

	第1部	第2部	第3部
平均点	1.2	1.8	0.9
0点の生徒の数と割合	33人(29.2%)	8人(7.1%)	46人(40.7%)

<分析と考察>

第1回リスニングテストでは、5割（5点以上）得点した生徒は48人(42.5%)のみであった。また0点の生徒もあり、特に第3部は46人(40.7%)と多く、英語の対話や説明を聞いて概要や要点を的確に把握する力が乏しいことが分かった。

リサーチ・クエスチョン

対話や長めの英語を聞いて、その概要や要点を的確に理解する力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・アンケートで「長めの英語を聞いて概要や要点をつかむ力は向上した」と回答する生徒が全体の7割以上になる。

・英検準2級の同形式問題で5割（5点）以上の生徒が全体の6割以上になる。

改善のための手立て

○ 帯活動として、リスニングのボトムアップ処理に関わる指導を取り入れれば、概要や要点をよりの確に聞き取れるようになるだろう。

・日本語にはない音（母音・子音）を中心に音声学的知識を身に付けさせる。

- ・英語特有の音変化（リズム・連結・脱落・同化などのプロソディー）を意識させるディクテーション活動に取り組ませる。

○ リスニングのトップダウン処理に関わる指導を取り入れれば、概要や要点を的確に聞き取れるようになるだろう。

- ・教科書の導入時にオーラルイントロダクションを取り入れ、キーワードや提示した写真等の知識を活用して英文を聞き取るようにする。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回アンケート（11月末実施：回答者数101）

1. 4月当初と比較して自身のリスニング力は向上しましたか。

はい	いいえ
72人(71.3%)	29人(28.7%)

2. 長めの英語を聞いて概要や要点をつかむ力は向上しましたか。

はい	いいえ
65人(64.4%)	36人(35.6%)

3. 英語学習において、以前よりも英語の音に意識が向くようになりましたか。

はい	いいえ
88人(87.1%)	13人(12.9%)

<分析と考察>

第2回アンケートでは、7割以上の生徒がリスニング力の向上を感じていることが分かった。しかし目標としていた「長めの英文を聞いて概要や要点をつかむ力」については、向上を実感した生徒の割合は改善の目安の7割に届かず、64.4%にとどまった。しかし英語の音に対する意識の向上は見られ、ボトムアップ処理に関わる指導の成果が感じられた。

・第2回リスニングテスト（11月実施：受験者数105）

問題：第1回と同じ

結果（9点満点）：

平均点	5割（5点）以上
4.0	38人(36.2%)

各部ごとの平均点と0点の生徒の数（それぞれ3点満点）：

	第1部	第2部	第3部
平均点	1.3	1.3	1.4
0点の生徒の数と割合	23人(21.9%)	21人(20.0%)	17人(16.2%)

<分析と考察>

第2回リスニングテストで、5割（5点）以上得点した生徒の割合を全体の6割まで伸ばすことはできず、目標の達成には至らなかった。個々の生徒の伸びを計るために t 検定 (paired t 検定) を行ったところ、合計点では有意差は認められなかった ($p=0.69$) が、第3部に関しては有意差が認められ ($p=0.01<0.05$)、概要や要点をつかむための指導について一定の成果が感じられた。また第3部における0点の生徒が、46人(40.7%)から17人(16.2%)に減少したことも、前向きに捉えたい。

教師の変化

- ・これまではリスニング指導と言いながら、リスニング問題を解かせる指導で終わっていたが、ボトムアップ処理とトップダウン処理を組み合わせながら、継続的・明示的にリスニング指導をしていくことが有効であると学んだ。
- ・リスニングテストの点数だけからはわからない、生徒の意識の変化をアンケートから見取れたことで、自分の取組の成果を実感することができ、大きな励みとなった。

今後の課題（次の改善点など）

リスニングの学習法も指導のなかで伝えてきたが、それを生徒が家庭で実践しているかを確認する体制は十分とは言えないので、今後は積極的に取り組みたい。他にも、教科書本文だけでなくオーセンティックな教材を使った素材も取り入れることで、より生徒の興味・関心を引いた授業をしていきたい。

まとめ・感想

私自身の英語学習を振り返ると、リスニングの学習法に大いに悩んだ過去がある。毎日リスニング問題を解くことが正しいのか疑問だった。この1年、書籍に当たり効果的なリスニングの指導法を模索し実践していく中で、ボトムアップとトップダウンの観点で指導を組み合わせることが効果的だと実感した。地道に継続していくことで、徐々に生徒の英語を聞き取る力は向上する。授業での指導に加え、生徒自身の家庭学習をどう促していけるかが今後の課題だと感じた。

授業改善にあたって参考にした資料等

鈴木寿一・門田修平(編著). (2018). 『英語リスニング指導ハンドブック』大修館書店.

概要や要点を的確に理解する力を身に付けさせるリーディング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	-----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス115名（男子61名、女子54名）の生徒である。英語の基礎的な力は低いが、意欲的に授業に取り組む生徒は多い。例年進路は4年制大学、短期大学、専門学校、就職と様々である。

解決すべき課題

英文を読むことに苦手意識がある生徒が多いようだ。英文の読み方が分からず、内容理解問題に取り組むことを最初から諦めている様子が見られる。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・ 第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：受験者数114）

1. 初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することができますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
6人（5.3%）	30人（26.3%）	58人（50.9%）	20人（17.5%）

2. 初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識していますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
12人（10.5%）	29人（25.4%）	44人（38.6%）	29人（25.4%）

<分析と考察>

アンケートの結果、31.6%の生徒が初見の英文を読む時、英文の概要を素早く理解できている（かなりできている、まあまあできている）と回答している。また、筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識できている（かなりできている、まあまあできている）生徒の割合は36.0%であった。具体的な読解のストラテジーを指導していく必要がある。

- ・ 第1回リーディングテスト（7月実施：受験者数111）

250字程度の説明文の概要や要点を読み取る力を調べるため、英検3級の過去問3Cを使用し、選択式問題5問に取り組みさせた。1問1点で5点満点とした。解答時間も含めて制限時間は8分。終了後、正答率を掛け合わせてWPMを計算させた。

0点	1点	2点	3点	4点	5点	8割(4点)以上	平均点	平均WPM
1人 (0.9%)	6人 (5.4%)	28人 (25.2%)	37人 (33.3%)	26人 (23.4%)	13人 (11.7%)	39人 (35.1%)	3.1点	26.4語

<分析と考察>

5点満点のテストで8割(4点)以上取った生徒の割合は35.1%であり、英検3級レベルの説明文を的確に読み取る力は十分でない。また、正答率を掛け合わせたWPMの値は26.4語と低く、多くの生徒がスムーズに自分の力で読み進めることができていない。

リサーチ・クエスチョン

説明文などをスムーズに自分の力で読み進め、概要や要点を的確に理解する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・アンケートで「初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解できている」と回答する生徒の割合が全体の7割を超える。

・リーディングテストで8割(4点)以上取る生徒の割合が全体の7割を超える。

改善のための手立て

- 読解ストラテジーを明示的に指導すれば、概要や要点を的確に理解できるようになるだろう。
 - ・読解の際にパラグラフの機能や、前後のパラグラフの関係について留意して読むよう指導する。
 - ・however や therefore 等の論理マーカの役割を指導し、文の流れをつかめるよう指導する。
- リーディング活動を工夫すれば、概要や要点を的確に理解できるようになるだろう。
 - ・概要や要点を把握するための問いを与える。
 - ・分からないと内容理解に支障が出るような単語の指導を、読む前に行った上で、語源についての知識や文脈に関する理解を基に、未知語を推測するタスクを与える。
- 教科書の英文に加えて、別の英文を読む活動を定期的に設ければ、初見の英文を自分の力で読み進めることができるようになるだろう。
 - ・定期的に5分程度で取り組める簡単な読解問題を行い、初見の英文を読む演習をさせる。
 - ・時間を測りながら、自分の読む速度の変化を確認させる。

生徒の変化(途中経過、事後の検証結果など)

- ・第2回英語学習に関するアンケート(12月実施：受験者数85)
 1. 初見の英文を読む時、英文の概要を素早く理解することができていますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
7人 (8.2%)	25人 (29.4%)	33人 (38.8%)	20人 (23.5%)

2. 初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識していますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
10人 (11.8%)	44人 (51.8%)	23人 (27.1%)	8人 (9.4%)

<分析と考察>

初見の英文を読む時、英文の概要を素早く理解できている（かなりできている、まあまあできている）と回答した生徒の割合は第1回の31.6%から37.6%とわずかに増加したが、改善の目安とした全体の7割には届かなかった。筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識できている（かなりできている、まあまあできている）生徒の割合は第1回の35.9%から63.5%に大きく増加し、有意な伸長が認められた($p=0.00<0.05$)。残念ながら、多くの生徒は概要や要点を的確に理解する力の向上を実感することはできていなかった。しかし、アンケートの結果から、授業で学習した読解ストラテジーを活用し、英文を自分の力で読み進めようとしている生徒が増えたことが分かる。

・第2回リーディングテスト（12月実施：受験者数111）

内容は第1回リーディングテストと同様。

0点	1点	2点	3点	4点	5点	8割（4点）以上	平均点	平均WPM
4人 (3.6%)	6人 (5.4%)	13人 (11.7%)	46人 (41.4%)	31人 (27.9%)	11人 (9.9%)	42人 (37.8%)	3.1点	42.5語

<分析と考察>

第2回リーディングテストで8割（4点）以上取った生徒の割合は第1回の35.1%から37.8%にわずかに増加したが、改善の目安とした全体の7割を超えることはできず、 t 検定においても有意差は認められなかった($p=0.61$)。成果としては、平均WPMは第1回の26.4語から第2回の42.5語となり、英文を早く読み進める生徒が増えたことが分かる。

教師の変化

パラグラフリーディングで、キーセンテンスとなる英文を生徒たちに探させるために発問の仕方が変わった。具体的には、論理マーカーに着目させ、その前後の文の関係を尋ねるようになった。また、これまであまりできていなかったパラグラフとパラグラフのつながり等を意識したリーディング指導をするようになった。そして、以前は教科書の本文中に出てくる英単語の意味をすぐに教えていたが、文脈や語源から生徒たちに意味を推測させるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回、「パラグラフリーディングや論理マーカー等、読解に関するテクニックを理解することができた」という生徒の発言を多く聞いたが、「種類が多すぎて覚えられず、読解につなげることができなかった」という生徒もいたので、生徒たちが必要以上に負担を感じない形での読解ストラテジーの指導の仕方を模索する必要があると感じた。

まとめ・感想

パラグラフリーディングについての指導や論理マーカー等の知識について、最初に授業で生徒たちに導入した時はあまり反応が良くなかった。だが、授業を進めていくうちに生徒たちが自分から論理マーカーを見つけたり、知らない単語を、語源に区切って推測したりする姿が見られた。最終的には読解ストラテジーを意識する姿勢を身に付けさせることができて良かった。来年度も継続して指導し、生徒のリーディング能力を効果的に伸ばしていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

- 島田浩史・米山達郎. (2005). 『英語長文読解の王道 パラグラフリーディングのストラテジー (1) 読み方・解き方編』河合出版.
- 国生浩久. (2010). 『単語知らずのための英文読解法 英文速読への未知単語推測法』学研プラス.
- 金谷憲(編)他. (2012). 『英語授業ハンドブック<高校編>』大修館書店.

自信をもって英文を読む姿勢を身に付けさせる指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	---

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は1学年2クラスを3展開しているうちの2クラスの生徒、合計26名（男子13名、女子13名）である。生徒は素直で大変おとなしいクラスである。学習意欲は高く、英語に興味がある生徒の数は多いように思われる。例年卒業後はほとんどの生徒が国公立大学を含む四年制大学への進学を希望しており、ほとんどの生徒が一般受験で大学進学を目指す。

解決すべき課題

多くの生徒は教科書の英文を使った音読活動やペアワークに対して消極的である。読んだ内容をよく理解していないか、理解していても自信がなくて、内容についてペアで話し合ったりすることが積極的にできないのではないかと推察する。読んだ内容を深く理解させるために、和訳に頼った読み方でなく、英文の概要や要点を捉える読み方を指導する必要がある。また、指導を通して生徒が主体的に英文を読む姿勢を育てていきたい。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語学習についてのアンケート（4月実施：回答者数22）

あなたは英語を使うことに自信がありますか

ある	すこしある	あまりない	まったくない
2人(9.1%)	2人(9.1%)	9人(40.9%)	9人(40.9%)

- ・第1回リーディングテスト（4月実施：受験者22）

英文の内容や概要を読み取れているかどうかを測定するため、英検準2級4B説明文の英文を読ませた。問1～問4までは既成の問題を用い、問5にはタイトルを英語で書かせる問題を自作し、配点は1問1点の5点満点とした。

0点	1点	2点	3点	4点	5点	概要問題 (問5)
0人 (0.0%)	1人 (4.5%)	2人 (9.1%)	9人 (40.9%)	8人 (36.4%)	2人 (9.1%)	2人 (9.1%)

<分析と考察>

第1回アンケートで英語を使うことに自信が「ある」「少しある」と回答した生徒の割合は18.2%でとても低いことが分かった。第1回リーディングテストの全体のボリュームゾーンは3点から4点で77.3%を占めた。5点満点中4点以上取った生徒の割合は45.5%で、英文の概要や要点を概ね理解していたと言えるのは半数以下であった。英文は比較的平易な内容だったが、タイトルを英語で記述する概要問題(問5)になると正解率は9.1%と極端に低い。英文をどう読み進めていくかを指導し、読み取った内容を他者に伝える活動を通して内容への理解を深めさせ、概要や要点を理解する力を育てる必要がある。また、相手に伝わったという成功体験を積ませて自信を育てる必要があると考えた。

リサーチ・クエスチョン

自信をもって英文を読み進め、的確に概要や要点を理解する力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・アンケートで英語を使うことに自信が「ある」「少しある」と回答する生徒の割合が8割を超える。

- ・リーディングテストの英検準2級4Bの問題で5点満点中4点以上取る生徒の割合が全体の8割を超える。
- ・リーディングテストの概要問題(問5)の正解率が8割を超える。

改善のための手立て

- リーディングストラテジーの指導を行えば、英文の概要や要点を的確に理解できるようになるだろう。
 - ・ 目的に合わせて、効率の良い速さで読むよう指導する。
 - ・ 構成や流れを示す論理マーカーなどを見つけて読むよう指導する。
 - ・ 文脈から語の意味を推測して読むよう指導する。
 - ・ 背景知識を使って、スキーマを活性化させることによって、文脈を推測しながら読むよう指導する。
- リーディング活動を工夫すれば、リーディングストラテジーを使う読み手になり、英文の概要や要点を的確に理解できるようになるだろう。
 - ・ 異なるタスクを与えて同じ英文を2回読む活動に取り組みさせる。1回目は概要や要点の理解を確認する選択問題、2回目は英文の構成を考えて、グラフィックオーガナイザーを完成させるタスクに取り組みさせる。
 - ・ 未知語の意味を文脈から推測させるタスクに取り組みさせる。
 - ・ 読む前に、関連する視覚教材を示し、内容についてペアで話し合いをさせたり、教師からの質問に答えさせたりして、背景知識を増やすための活動に取り組みさせる。
- 英文を読んで概要や要点を理解する練習や、読んだ内容について話し合ったりする活動を繰り返す

行えば、英文を読むことに慣れ、自信をもって読み進められるようになるだろう。

- ・教科書の英文に関連したトピックの英文、150語程度の未知語がある程度含まれる英文などを読んで、要点問題とタイトルを英語で記述する概要問題に取り組みさせる。
- ・教科書の英文を読んだ後、ペアやグループでリテリングに取り組みさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数22）

あなたは英語を使うことに自信がありますか

ある	少しある	あまりない	まったくない
4人(18.2%)	11人(50.0%)	7人(31.8%)	0人(0.0%)

- ・第2回リーディングテスト（12月実施：受験者数22）

問題形式は第1回リーディングテストと同じ。

0点	1点	2点	3点	4点	5点	概要問題 (問5)
0人 (0.0%)	1人 (4.5%)	5人 (22.7%)	4人 (18.2%)	9人 (40.9%)	3人 (13.6%)	12名 (54.5%)

<分析と考察>

英語を使うことに自信が「ある」及び「少しある」と回答した生徒の割合は、第1回では18.2%（4人）に過ぎなかったが、第2回では68.2%（15人）に増加した。目標とした8割には及ばなかったが、生徒の英語を使うことに対する自信に大きな変化があったのを見て取れる。

一方読む力については、第1回リーディングテストと比較してみると、4点以上の生徒の割合が45.5%（10人）から54.5%（12人）に増加したものの、1点から2点にいる生徒も増えてしまい、今回設定した「5点満点中4点以上取る生徒の割合が全体の8割を超える」という目標を達成することはできなかった。概要問題については、正解した生徒の割合が第1回の時点では9.1%（2人）であったが、今回のテストでは54.5%（12名）まで伸ばすことができ、paired-t検定にかけたところ、有意な向上が見られた($p = 0.00$)。

今後の課題（次の改善点など）

今回の研究では、概要や要点を捉えることを重点的に指導した結果、語彙・表現・文法などの知識を理解し深めることが疎かになった一面がある。今後の指導計画の中では、概要や要点をとらえる学習活動に加えて、英文の理解に不可欠な語彙や文法などの言語材料の指導を、バランスよく取り入れたい。

教師の変化

これまで私は、部分的な内容理解の質問に答えることができただけで、生徒が英文を読み取ることが

できている、という判断をしていた。また、概要をつかむことは大切であることはわかっている、どのような指導をすればその力を育てることができるか、その手立てがはっきりしていなかった。今回、読み取った内容を自分の言葉で説明したり感想を述べたりする活動を通して、生徒が英文の内容を深く理解できる授業の在り方を考えるようになった。また今回の結果から、英文を読んで理解するために必要な語彙や文法の習得と、素早く英文を読んで概要や要点を理解する力の育成の両方を、バランスよく行わないといけない、ということを考えるようになった。初見の英文を読んで理解する力を養うためのリーディング指導について、研修で学んだ理論に当てはめながら考えていきたい。

まとめ・感想

リサーチ・クエスチョンを立てることが、自分にとってはかなり難しかった。今回はリーディングを選んだが、何度も、「自分がやりたいことはリーディングなのか、スピーキングなのか」と迷い、教育センターのスタッフの方々にアドバイスをいろいろもらうことで、なんとかリサーチを進めることができた。今後は生徒のニーズを把握したうえで授業改善に向けての問いを立て、その手立てを考えながら授業のデザインに取り組みたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

Patty M. Lightbown. (1993). 『How Languages are Learned』 Nina Spada Oxford University Press.

佐々木啓成. (2020). 『リテリングを使用した英語指導』 大修館書店.

金谷憲・堤孝. (2017). 『レッスンごとに教科書の扱いを変える TANABU Model とは』 アルク.

実践的コミュニケーションに結び付くスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	-----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は1クラス40名（男子22名、女子18名）の生徒である。対象のほぼ全生徒が、国公立大学を含む4年制大学への進学を希望する。英語の学習意欲が高い生徒が多く、基礎的な語彙及び文法は定着している。

解決すべき課題

英語が好き、もしくは得意である生徒が過半数おり、音読も上手にできる生徒が多いが、ペアやグループで英語を話す活動になると間違いを恐れるあまりに話すことを諦めてしまう生徒が多い。また、論理的に英語で応答する力にも課題がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・ 第1回 英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数39）

1. あなたは英語が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
10人(25.6%)	16人(41.0%)	12人(30.8%)	1人(2.6%)

2. 英語を話すことに自信がありますか。

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
0人(0.0%)	7人(17.9%)	20人(51.3%)	12人(30.8%)

- ・ 第1回 スピーキングテスト（5月実施：受験者数39）

テスト内容：英検準1級のスピーキングの問題を使った、子どものゲーム遊びに関する4コマのナレーション、及びゲームが子どもに与える影響に関する追加質問への応答

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	Delivery 話し方	Accuracy 正確性	Contents 内容
A (5点)	発音、イントネーション、抑揚、声量、明瞭さ、話す速度、強調が適切であり、聞き手が十分に理解できる。	文脈に即した文法が正確に使われており、聞き手が十分に理解できる。	内容に一貫性があり、理由と例示・説明などにより、意見に十分な説得力がある。
B (3点)	発音、イントネーション、抑揚、声量、明瞭さ、話す速度、強調がある程度適切であり、聞き手が理解できる。	文脈に即した文法がある程度正確に使われており、聞き手が理解できる。	内容に一貫性があり、意見にある程度の説得力がある。
C (1点)	発音、イントネーション、抑揚、声量、明瞭さ、話す速度、強調が適切ではなく、聞き手があまり理解できない。	文脈に即した文法が正確に使われておらず、聞き手があまり理解できない。	内容に一貫性がなく、また理由や例示・説明などがほとんどない。

結果：

	Delivery 話し方			Accuracy 正確性			Contents 内容		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
第1回	4人 (10.3%)	24人 (61.5%)	11人 (28.2%)	4人 (10.3%)	31人 (79.5%)	4人 (10.3%)	2人 (5.1%)	20人 (51.3%)	17人 (43.6%)

※すべての観点でB評価以上の生徒は20人（51.3%）

<分析と考察>

アンケートの結果、合わせて66.7%の生徒が「英語が（どちらかといえば）好き」と回答した。一方、「英語を話すことに（どちらかといえば）自信がある」と回答した生徒はわずか7人（17.9%）にとどまった。生徒は将来的に英語を話す必要性は感じており、ディベート力の向上のみならず、友人と豊かにコミュニケーションを取りたい、という意見が多かった。

スピーキングテストの結果において、「Contents 内容」のC評価が17人（43.6%）と多く、論理性の不足のために意図した内容が伝わらない生徒が半数近くいた結果となった。「Delivery 話し方」におけるC評価の生徒も28.2%おり、ルーブリック評価のすべての観点でB評価以上の生徒は20人（51.3%）であった。スピーキングの機会をできる限り与えることで、英語で話すことに慣れさせる必要があると感じた。また、瞬間的に既習の語彙・表現を思い出せないために応答ができず、話すことを諦めてしまう生徒も見られたため、伝えたい内容を別の表現で言い換える練習や、話す活動の前に意見やディベートの立論・反論を論理的にまとめる等の工夫を行う必要性を感じた。

リサーチ・クエスチョン

自信をもって、論理的な質の高いやり取りをする力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：

- ・スピーキングテストのルーブリックですべての観点でB評価以上の生徒が全体の7割以上になる。
- ・アンケートで「英語を話すことに（どちらかといえば）自信がある」と回答する生徒が全体の5割を超える。

改善のための手立て

○ 活動を工夫して発話する場面を増やせば、英語を話すことに慣れ自信をもって話せるようになるだろう。

- ・導入の帯活動として、その日の出来事（悩み、今日した良いことなど）をペアで共有させる。
- ・ペアワークで身近な出来事やクイズの出題をさせ合う。
- ・プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなどのグループワークを増やす。
- ・ディベートやディスカッションのテーマを、身近な話題のものから社会的、高尚な話題まで幅広く取り扱い、自身の意見を述べさせる。
- ・ペアやグループのシャッフルを頻繁に行い、インフォメーション・ギャップのある状態を常に作り出す。

- ・会話特有の表現の形式を教える。

○ プラニングの指導をすれば、意見や主張の論理性を高めることができ、論理的な質の高いやり取りができるようになるだろう。

- ・アイデアジェネレーションのためのブレインストーミングおよびマッピングなどを行わせる。
- ・グラフィックオーガナイザーなどを各自に取り組みさせてから、ペアで共有させる。
- ・ディベート (PDA 方式など) の立論の構築のために下書きさせ、十分な準備をさせてから行わせる。
- ・即興ディベートの反論も、数分間の意見をまとめさせる時間を取る。

生徒の変化 (途中経過、事後の検証結果など)

- ・ 第2回 スピーキングテスト (12月実施: 受験者数 33)

テスト内容: 英検準1級のスピーキングの問題を使った、就職活動をする学生に関する4コマのナレーション、及び日本の大学の卒業の難易度に関する追加質問への応答

評価方法: 自作ループリックによる分析的評価

結果:

	Delivery 話し方			Accuracy 正確性			Contents 内容		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
第1回 (5月)	4人 (10.3%)	24人 (61.5%)	11人 (28.2%)	4人 (10.3%)	31人 (79.5%)	4人 (10.3%)	2人 (5.1%)	20人 (51.3%)	17人 (43.6%)
第2回 (12月)	15人 (45.5%)	13人 (39.4%)	5人 (15.2%)	4人 (12.1%)	26人 (78.8%)	3人 (9.1%)	6人 (18.2%)	17人 (51.5%)	10人 (30.3%)

※すべての観点がB評価以上の生徒は22人 (66.7%)

- ・ 第2回 英語学習に関するアンケート (12月実施: 回答者数 38)

1. あなたは英語が好きですか (好きになりましたか)。

	好き(になった)	どちらかといえば好き(になった)	どちらかといえば嫌い(になった)	嫌い(になった)
第1回 (4月)	10人(25.6%)	16人(41.0%)	12人(30.8%)	1人(2.6%)
第2回 (12月)	4人(10.5%)	18人(47.4%)	10人(26.3%)	6人(15.8%)

2. 英語を話すことに自信がありますか (もてるようになりましたか)。

	ある (もてるようになった)	どちらかといえばある (もてるようになった)	どちらかといえばない (自信がもてなくなった)	ない (自信がもてなくなった)
第1回 (4月)	0人(0.0%)	7人(17.9%)	20人(51.3%)	12人(30.8%)
第2回 (12月)	2人(5.3%)	8人(21.1%)	20人(52.6%)	8人(21.1%)

<分析と考察>

スピーキングテストのすべての観点がB評価以上の生徒は22人 (66.7%) と目標の70%には届かなかったが、発音の明瞭さ等の「Delivery 話し方」の観点においては、A評価の生徒が10.3%から45.5%に増え、発話量も増えるなど、授業改善の成果が感じられた。Wilcoxonの符号付順位検定においても有意な向上が認められた ($p=0.00<0.05$)。「Contents 内容」についてもA評価の生徒が2人から6人

に増え、わずかではあるが改善が見られた。

もう1つの改善の目安であった、「英語を話すことに（どちらかといえば）自信がある」生徒の割合は26.3%にとどまり、全体の5割を超えるという目標には届かなかった。様々なスピーキング活動に取り組む中で、「言いたいことが上手く言えない」など、自分のスピーキング力を客観的に知ることとなり、自信をなくしたものと分析する。その一方で、自信を持てるようになった生徒は17.9%から26.3%に増えており、今後も手立てを続けることで、少しずつ効果が現れてくることを期待する。

教師の変化

ペアワークやグループワーク等を通じて授業に積極的に参加する生徒が増えたと実感したことで、自分自身がさせている活動が生徒にどのような力を身に付けさせているのか、活動の目的を改めて考察するようになった。また、生徒が話しやすい雰囲気を作り出すための、身近な話題などの事前の教材準備に時間を費やすことが一番大切であることを痛感し、毎回の授業準備にいつそう専念するようになった。「話すことが嫌いになった」と回答する生徒も数名いたことから、生徒とコミュニケーションを取り一緒に授業を作り上げていく姿勢も持つようになった。

今後の課題（次の改善点など）

スピーチの発表等のプレゼンテーションの評価だけではなく、ディベートやディスカッション活動など、グループワークやペアワークでの対話的な応答・やり取りを評価し成績に反映することができれば、生徒の論理的なスピーキング力向上に対するモチベーションも維持することができると思う。そのような評価法の実現のためにも、前年度の時点で、担当者間で評価方法や単元の目標や指導法の確認をするなど、教える側の授業改善に取り組む積極的な姿勢が不可欠である。また、「正確性」の向上も実践的な対話能力には欠かせないため、今後は文法等に関するフィードバックを与える活動も取り入れていきたい。

まとめ・感想

全体的なスピーキング力の向上が確認できたため、本研究の意義があったと実感した。この研究結果を同僚と共有し、指導法や年間目標、教材等も英語科全体で今後も密に共有していくことで、本校教員が一丸となって生徒のスピーキング力を伸ばす、楽しくやりがいのあるチャレンジに挑んでいきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

Brown, S., & Larson-Hall, J. (2012). *Second Language Acquisition Myths: Applying Second Language Research to Classroom Teaching*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
高島英幸(編著). (2020). 『タスク・プロジェクト型の英語授業』大修館書店.

即興で論理的に意見のやり取りをする力を伸ばす指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	-----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス118名（男子69名、女子49名）の生徒である。落ち着いて授業を受ける雰囲気は整っており、ほとんどの生徒が活動に積極的に取り組んでいる。全体に向けた発問についても積極的に声を出して答えようとし、ペアワークでも相手に伝わる声で積極的に会話する様子が見られる。ほとんどすべての生徒が大学進学を希望しており、難関国公立大学や私立大学を目指している。

解決すべき課題

入学して間もない生徒たちの様子から、スピーキング活動に積極的に取り組んではいるが、理由や根拠と共に自分の意見を話すことには課題を感じる。発問を工夫することで教科書題材について深く考えさせ、社会的な話題について即興で論理的に話す力を身に付けさせたい。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数116）

テスト内容：英検2級2次試験の問題形式で、ランダムに選ばれたトピックについて、ペアで即興で自分の考えを伝え合う力を測定した。（トピック：お掃除ロボット・水の使い過ぎ・第3外国語の学習・公共のマナー・学校でのタブレットPC使用）

評価方法：自作ルブリックによる評価

	正確さ（文法・発音）	内容	応答の仕方	会話の継続
A	文法的な誤りはほとんどない。 はっきりとした発音で話しており、英語のスピーチとして理解しやすい。	話題について、即興で自分の考えを形成・整理し、自分の考え、根拠や具体例・気持ちなどを適切に伝えることが十分にできている。	相手の意見を正しく理解し、会話を発展させることが十分にできている。 相手の意見に対し内容を深める質問をし、会話を発展させることができている。	2分間会話を継続することができている。
B	文法的な誤りが見られるが理解に支障はない。 ところどころ発音が不明瞭だが、理解を妨げるほどではない。	根拠や具体例を挙げながら、与えられたトピックに関する自分の意見を適切に述べている。	相手の意見に対し、適切にリアクションできている。 相手の意見に対し、質問をすることができている。	1～2分間会話を継続することができている。
C	理解が困難となるような文法上の誤りが見られるため、考えが十分に伝わらないところがある。	与えられたトピックに関する自分の意見を述べているが、根拠や具体例がない。	相手への質問と適切なリアクションのどちらかができていない。	ほとんど話すことができない。

	強い日本語のアクセントで話しており、聞き手が努力すればかろうじて意味が分かる。			
D	文法上の誤りが多く、意味が通らず伝わらない。日本語を交えて話していて、英語のスピーチとして不完全である。	意見が言えていない。	相手への質問も、適切なリアクションもどちらもできていない。	全く話すことができない。

結果：

	正確さ(文法・発音)	内容	応答の仕方	会話の継続
A	7人(6.0%)	4人(3.4%)	17人(14.7%)	107人(92.2%)
B	109人(94.0%)	110人(94.8%)	93人(80.2%)	9人(7.8%)
C	0人(0.0%)	2人(1.7%)	6人(5.2%)	0人(0.0%)
D	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

<分析と考察>

それぞれの観点で9割以上の生徒がB以上の評価であったが、個別に見ていくといくつかの課題がある。例えば「応答の仕方」がA評価の生徒は14.7%と少なく、B評価の生徒は、相手の意見を尋ねることはできても、その内容を深めるような質問をし、会話を発展させるまでには至っていなかった。

「内容」に関してもA評価の割合は3.4%と少なく、B評価の生徒たちに関しては、根拠や具体例は一応言えてはいるが意見・根拠・具体例の繋がりが弱く説得力に欠ける部分があり、論理性を高める必要があると考える。

リサーチ・クエスチョン

聞いたり読んだりしたことをもとに、社会的な問題について、即興で論理的にやり取りをし、会話を発展させる力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・スピーキングテストの評価ルーブリックで「内容」がAになる生徒が全体の7割を超え、「応答の仕方」がAになる生徒の割合が全体の5割以上になる。

・アンケートで「高校に入学してからこれまでの期間、英語でやり取りをする力が(どちらかといえば)伸びてきた」と回答する生徒の割合が、全体の7割以上になる。

改善のための手立て

○ 帯活動で継続してスピーキング活動を行えば、積極的にコミュニケーションを図ろうとするようになり、即興で話すことへの抵抗感がなくなるだろう。

・身近な題材について即興で話す活動を毎時間帯活動として行い、2分間会話を継続させる。

・教員自身の答えを例として示し、答えのイメージを示す。

○ 相手の意見に対して質問する活動を継続して行えば、やり取りを継続することができるようになり、会話を発展させることができるようになるだろう。

・良いコミュニケーターとしての姿勢について考えさせ、会話で使える表現を示す。

- ・相手の意見をよく聞き、正しく理解した上で質問するよう促す。
- ・相手の意見に対して感じたことを伝えたり質問をするなど、やり取りを続けるための表現を示す。

○ 論理的に思考する力が向上すれば、即興で論理的にやり取りをする力も高まるだろう。

- ・論理的に文章を組み立てる方法を指導するために、Opinion (意見) →Reason (理由) →Example (具体例) →Opinion の流れでの英作文を継続して行う。
- ・教科書の内容について深く考えさせ、生徒自身の意見を問う発問をする。
- ・やり取りの際、OREO の視点で相手の意見を引き出す質問をし合うようにする。
- ・生徒の意見をペアやクラス全体で共有し、教員と生徒でやり取りをしたり、コメントをする。

生徒の変化 (途中経過、事後の検証結果など)

・事後アンケート (11 月実施 : 回答者数 114)

1. 高校に入学してからこれまでの期間、英語でやり取りをする力が伸びてきたと思いますか。

思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば 思わない	思わない
36 人 (31.6%)	57 人 (50.0%)	17 人 (14.9%)	4 人 (3.5%)

2. (英語でやり取りすることに関して) 具体的にできるようになったことは何ですか。 ※複数回答可

相手の言うことの論理 の流れを把握すること	相手の言ったことに対し て感想を言うこと	相手が話しやすくなる ように相槌を打ったり、 会話を促すこと	相手の話す内容を補う 質問をすること (理由・具体例)	相手に分かるような言 い回し、言い換えをす ること
43 人 (37.7%)	32 人 (28.1%)	56 人 (49.1%)	21 人 (18.4%)	26 人 (22.8%)

<分析と考察>

「英語でやり取りをする力が伸びてきた」と回答する生徒が全体の 7 割以上になるという改善の目安は達成された。具体的にできるようになったこととしては、「相手の言うことや論理の流れを把握すること」と回答している生徒の割合が 37.7%を占める。また、「相手の話す内容を補う質問をすること (理由・具体例)」と答えた生徒も 18.4%おり、相手が話す内容について、論理の流れを把握しながらやり取りをすることができるようになった生徒が増えてきたと考える。

・第 2 回スピーキングテスト (11 月実施 : 受験者数 110)

テスト内容 : トピック以外は第 1 回と同じ。(トピック : ロボットによる教育・学校でのスマホ活用・AI による労働・使い捨てストロー・英語学習の必要性)

評価方法 : 自作ルーブリックによる評価 (第 1 回と同じ)

結果 :

	正確さ(文法・発音)	内容	応答の仕方	会話の継続
A	22 人 (20.0%)	90 人 (81.8%)	50 人 (45.5%)	110 人 (100.0%)
B	88 人 (80.0%)	20 人 (18.2%)	60 人 (54.5%)	0 人 (0.0%)
C	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)
D	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)

<分析と考察>

「応答の仕方」についてはAの評価が約30ポイント増加し、45.5%となった。改善の目安である5割には届かなかったが、相手の意見を受けた上で会話を発展させる姿がみられるようになったことは一つの成果であると考え。「内容」についてはAの評価が全体の8割を超え、改善の目安を達成することができた。第1回スピーキングテストで課題であった意見・根拠・具体例のつながりが明確になり、論理的に意見を伝えることができるようになった生徒が増えた。「正確さ」および「会話の継続」を含めたすべての観点において有意な伸長が見られ(すべて $p=0.00<0.05$)、今回の手立てが生徒の全般的なスピーキング力の向上に効果的だったことが分かった。

教師の変化

スピーキング活動において、どのような題材を与えれば生徒はより視野を広げ、相手と考えを深め合うことができるのかを考えるようになった。また、生徒の答えをクラスで共有することで、生徒の考えを把握することができ、生徒たちが共感したり自分の意見を見直したりする場面をつくることができた。また会話の後、数人の生徒の意見をクラス全体で共有する場面においては、クラス全員が一人ひとりの意見にじっくり耳を傾け、その意見を受け止めようとする姿が見られた。生徒の意見に対しどのような声掛けをすれば、互いを認め合う雰囲気をつくり、生徒を笑顔にすることができるかということ意識するようになった。

今後の課題(次の改善点など)

相手の意見を受けてその内容について質問し、会話を発展させる力を付けさせるために、スピーキング活動を継続して行いつつ、一つの話題についてよく考え、それに関する質問を考えるという活動に焦点を当てて行ってみたい。

まとめ・感想

生徒の意欲を高めつつ、楽しみながら生徒に力を身に付けさせるには何をどのように指導すべきかということを探った期間であった。教科書の題材を通して何を考えさせどんなやり取りをして生徒たちの心を繋ぐのかということを考える視点をもつことができたのは、本研究に携わった成果である。このような研修の機会をいただいたことに心から感謝し、研修でご指導いただいた先生方、研修に参加された他校の先生方、同じ手立てを実践してくださった本校の先生、そして生徒たちにお礼を伝えたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

泉恵美子・門田修平(編著). (2016). 『英語スピーキング指導ハンドブック』大修館書店.
樋口忠彦(監修)、高橋一幸(編著者代表). (2019)『Q&A 高校英語指導法事典 現場の悩み133に答える』教育出版.

自信をもって論理的に話す力を育てる指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	----	---	----	-----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス77名（男子38名、女子39名）の生徒である。国際交流に興味を持ち、英語力を向上させたいと思っている生徒が多く、活動には意欲的に取り組むが、英語力への自信のなさから、発問をしてもあまり返答が見られない。例年、大学への進学を希望する生徒が多い。

解決すべき課題

身近なことについて、自身の考えや気持ちをある程度まとめた分量で、自信をもって英語で話して欲しいのだが、簡単な言葉で返答するのみである。授業の導入で話す活動を行っても、1分も英会話が続かないどころか、ペアで30秒話し続けることに困難を感じている場合も多く見受けられる。まずはトピックについて自身の考えたことや気持ちを、ある程度の分量を話す力を育てたい。

事前の現状把握（アンケートの結果、テストの結果）

- ・第1回アンケート（4月実施：回答者数69）

1. 英語を話す力はこれからの生活の中で必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
55人(79.7%)	12人(17.4%)	2人(2.9%)	0人(0.0%)

2. 英語で、どのようなことを話せるようになりたいですか。（複数回答可）

自分・家族・学校などの紹介	身近な事柄についての説明	身近な話題に関する意見	聞いたり読んだりしたことへの意見	社会的な問題に関する意見
11人(15.9%)	39人(56.5%)	25人(36.2%)	29人(42.0%)	7人(10.1%)

<分析と考察>

「どちらかといえばそう思う」をあわせると、97.1%の生徒が「英語を話す力はこれからの生活の中で必要」であると考えていることが分かった。また、「話せるようになりたいこと」として、「身近な事柄についての説明」が56.5%と一番多く、身近な事柄について話せる力を生徒に付けさせる必要があると感じた。

- ・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数72）

テスト内容：英検準2級2次試験の間4と5を20題ずつ集めてそれを活用し（以降、質問1・質問2とする）、以下の自作ルーブリックにしたがって評価した。

質問1の例：Do you think it is a good idea for students to work part-time?

質問2の例：These days, many people exercise to stay healthy. Do you often exercise?

	内容	正確さ	話し方
A	<質問1>話題に対して、2つ以上の理由や例などによって論理的に意見を表明している。 <質問2>話題に対して、2つ以上の自身に関する情報を追加して内容を深めて述べている。	正確な文の形で応答している。	声の大きさ、明瞭さ、話す速度が適切であり、英語らしい強弱への意識や区切り方など、聞き手が理解しやすくなる工夫をしている。
B	<質問1>話題に対して、2つ以上の理由や例などによって意見を表明している。 <質問2>話題に対して、2つ以上の自身に関する情報を追加して述べている。	正確な文の形ではない部分があるが、伝わる表現で応答している。	声の大きさ、明瞭さ、話す速度が適切である。
C	<質問1、2>話題に対して意見を表明しているが、理由や例または自身に関する情報の内容が不十分である。または1つしか述べられていない。	正確な文の形ではない部分が多くみられ、内容が伝わらない。	声の大きさ、明瞭さ、話す速度が適切ではない。

	質問1 評価			質問2 評価		
	内容	正確さ	話し方	内容	正確さ	話し方
A	9人(12.5%)	6人(8.3%)	5人(6.9%)	13人(18.1%)	10人(13.9%)	10人(13.9%)
B	30人(41.7%)	40人(55.6%)	49人(68.1%)	44人(61.1%)	52人(72.2%)	57人(79.2%)
C	33人(45.8%)	26人(36.1%)	18人(25.0%)	15人(20.8%)	10人(13.9%)	5人(6.9%)

<分析と考察>

質問1について、「内容」でC評価の生徒が33人(45.8%)、「正確さ」では26人(36.1%)もあり、自信をもって話していると感じられた受験者は多くはなかった。また、質問2でも、文法的に正しい文を用いて、十分に英語らしい話し方で話すことができた生徒はほとんどいなかった。話すまでに少し時間を要す場面が多く多くの受験者に見られ、自身の考えたことや気持ち、身近なことについて、ある程度の分量で話すことができないという課題が明白となった。

リサーチ・クエスチョン

日常的なことについて、自身の考えや気持ちを、自信をもって論理的に話す力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・スピーキングテストの質問1と質問2のそれぞれの観点で、B評価以上の生徒の割合が全体の9割を超える。

- ・アンケートで「(まあまあ)自信をもって話す活動に取り組めるようになった」及び「日常的なことを話す力が(まあまあ)向上した」と答える生徒の割合が全体の8割以上になる。

改善のための手立て

- スピーキング活動の支援を工夫すれば、自信をもって正確に話せるようになるだろう。
 - ・話す前にどのようなことを話すか、メモを作成させる。
 - ・会話の枠組みや使用語彙を与え、それを活用して話す活動に取り組みさせる。
 - ・話した後に、活動中にできたことの振り返りを記録させる。
- 日常的なことを話す練習機会を多く設けたり、表現の指導を工夫すれば、英語を話すことに慣れて抵抗感が少なくなり、自信をもって正確に話せるようになるだろう。
 - ・帯活動を中心に、週に2回以上、教科書の内容に関連した話題についてペアで1分間会話させる。
 - ・いろいろな話題について汎用性のある表現や教科書で習った表現を話す前に提示し使うよう促す。
 - ・話した後に自身や相手が使用した表現を記録し、いつでも参照できるようにさせる。
- 論理的なディスコースの作り方を明示的に指導すれば、論理的に考えを整理して話せるようになるだろう。
 - ・つなぎ言葉やディスコースマーカーを使う練習に取り組みさせる。
 - ・抽象から具体へと話を展開させる練習に取り組みさせる。

生徒の変化（テストの結果、アンケートの結果）

- ・第2回スピーキングテスト（11月実施：受験者数72）

	質問1 評価			質問2 評価		
	内容	正確さ	話し方	内容	正確さ	話し方
A	28人(38.9%)	33人(45.8%)	33人(45.8%)	50人(69.4%)	33人(45.8%)	36人(50.0%)
B	36人(50.0%)	38人(52.8%)	37人(51.4%)	21人(29.2%)	39人(54.2%)	35人(48.6%)
C	8人(11.1%)	1人(1.4%)	2人(2.8%)	1人(1.4%)	0人(0.0%)	1人(1.4%)

- ・第2回アンケート（12月実施：回答者数63）

1. あなたは自信をもって話す活動に取り組めるようになりましたか？

取り組めるようになった	まあまあ取り組めるようになった	あまり取り組めるようにならなかった	ほとんど取り組めるようにならなかった
7人(11.1%)	37人(58.7%)	17人(27.0%)	2人(3.2%)

2. あなたは日常的なことを話す力が向上したと感じましたか？

感じる	まあまあ感じる	あまり感じない	ほとんど感じない
10人(15.9%)	36人(57.1%)	15人(23.8%)	2人(3.2%)

<分析と考察>

第2回スピーキングテストでは、すべての観点でA評価の生徒が大幅に増加、C評価の生徒が減少し、合計点を比較したところ、統計学的にも有意な向上が見られた($p=0.00<0.05$)。質問1の「内容」

以外の観点では、改善の目安とした「B評価以上の生徒の割合が全体の9割」を達成することができ、多くの生徒の話す力が向上したことがわかった。

第2回アンケートでは、「(まあまあ)自信をもって話す活動に取り組めるようになった」と回答した生徒の割合は69.8%、「日常的なことを話す力が(まあまあ)向上した」と答える生徒の割合は73.0%と、改善の目安とした8割を達成することはできなかったが、約7割の生徒が肯定的に回答した。否定的な回答をした生徒はその理由として「自分が話す単語や熟語が本当に正しいのかが不安だから」「英語の発音がわからないから」などとしており、伝えたいことを伝えたいが、正確さに不安を感じている生徒が少なくないということが分かった。教員が知識・技能の正確な運用を生徒に促し、明示的に指導してから練習を重ねることで、今後は改善していけるのではないかと感じる。

教師の変化

- ・単元で身に付けさせたい力を考え、ゴールタスクを必ず設定し、それを達成するための手段として授業をデザインし、必要な活動かどうかを考えて活動の取捨選択をする習慣がついた。
- ・以前よりも同僚と授業や教材について意見を交わし、考えを共有するようになった。

今後の課題(次の改善点など)

- ・生徒が質問の内容を聞き取れていない、または理解できていない可能性があるため、リスニング指導と発音指導も合わせて必要であると感じた。
- ・生徒が発話した内容にフィードバックを行うことがあまりできなかったため、適切なフィードバックの方法を考え実践していく必要があると感じた。
- ・話す前にメモを取る活動時に、ICT機器を用いて語彙や表現を調べさせているが、ウェブサイトやアプリケーションソフトの翻訳機能を正しく使いこなせないため、正しくない表現を正しいと思い込んで使用しているケースが見受けられる。英語の言語活動におけるICT機器の活用の仕方を指導すべきだと実感している。

まとめ・感想

生徒が英語の4技能5領域の中で最も必要で獲得したいと思っている「話す力」に焦点を当てて、アクション・リサーチを1年間行ってきたことで、多数の生徒が話す力が向上したと実感できる授業実践ができたという事実が、今後の自己の授業改善の中で大きな柱になっていくと確信している。改善の目安が未達成という結果に終わったが、さらに改善できる部分を見出すことができたので、この経験を活かして今後もアクション・リサーチの手法による授業改善を行い、自己研鑽に励みたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

- 白井恭弘(著)。(2023)。「『英語教師のための第二言語習得論入門 [改訂版]』大修館書店。
- 鈴木渉(編)。(2017)。「『第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店。
- 高島英幸(編著)。(2020)。「『タスク・プロジェクト型の英語授業』大修館書店。

自信をもって正確にやり取りする力を育てるスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・ 習熟度 ・小集団
-----	---------------	----	---	----	--

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は1クラス 26名（男子 16名、女子 10名）の生徒である。語彙力や文法理解などのスキルは基本的なレベルだが、英語を用いたコミュニケーションへの意欲は高く、ペアワークやグループワークなどの活動に積極的に参加する。対象の生徒全員が進学を希望している。

解決すべき課題

留学生やALTとの日頃のコミュニケーションの中で、話したいことや質問したいことがあってもそれを英語で表現することができず、それが理由で生徒が英語に対する自信やコミュニケーションへの意欲を低下させるような場面がある。会話をするにはリスニングとスピーキング、リアクションなど様々なスキルが要求されるが、これらについて十分な指導を行うことができていない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート調査（4月実施：回答者数 83[※]）※対象 26名を含む英語コミュニケーション I 履修の 83名にアンケートを実施

1. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
26人 (31.3%)	33人 (39.8%)	16人 (19.3%)	8人 (9.6%)

2. あなたは英語が得意だと思いますか、苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
5人 (6.0%)	32人 (38.6%)	22人 (26.5%)	24人 (28.9%)

- ・第1回スピーキングテスト（9月実施：受験者数 25）

内容：生徒同士のペアで「How was your summer vacation?」から始まる会話をさせた。事前に練習する時間を取った。平均ターン数を記録した。

評価方法：自作ルーブリックを用いて評価した。

	質問力	応答力	伝え方
A	正確な文の形で質問している。	正確な文の形で応答している。	声の大きさ、明瞭さ、話す速度が適切であり、強調くり返しなど、聞き手の理解を促す工夫をしている。

B	正確な文の形にはなっていないが、あきらめずに最後まで質問している。	正確な文の形にはなっていないが、あきらめずに最後まで応答している。	声の大きさ、明瞭さ、話す速度が適切である。
C	ほとんど何も質問することができない。	ほとんど何も応答することができない。	声の大きさ、明瞭さ、話す速度が適切でなく、もごもご話している。

* 正確な文：S+V 構造が確立していて、意味の理解に支障がないものとする。

結果：

	質問力	応答力	伝え方
A	9人 (36.0%)	7人 (28.0%)	25人 (100.0%)
B	16人 (64.0%)	18人 (72.0%)	0人 (0.0%)
C	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

平均ターン数：11.8回（最高ターン数20回、最低ターン数7回）

<分析と考察>

アンケートにおいて、71.1%の生徒が英語の学習が好き、又はどちらかといえば好きと回答している一方で、得意又はどちらかといえば得意と回答した生徒は44.6%しかいない。コミュニケーションへの意欲が高く、英語の学習は好きだが、英語に苦手意識を持っている生徒が多いことが分かった。意欲が高いだけに、自分の言いたいことがうまく伝えられなかったり、相手の言うことを聞き取れないことがあったりして、自分のイメージするコミュニケーションが取れていないことから自信を持っていないのだと推測した。

テストにおいて、25人全員の生徒が「伝え方」でA評価となり、平均ターン数は11.8回、最低ターン数は7回で、すべての生徒が適切な伝え方で会話を続けることができた。しかし、「質問力」でA評価は36.0%、「応答力」でA評価は28.0%に留まり、多くの生徒が正確な文の形で質問、応答できていなかった。過去に多くの使用経験がある「What subject do you like?」や「How many brothers do you have?」などの質問やそれらに対する応答は、正確な文の形で言うことができていたが、それ以外の新しい話題で正確な文を作ることができていないことが分かった。また、長く会話を続けることに意識が向きすぎると、正確さへの注意が散漫になる様子が見られた。

リサーチ・クエスチョン

身の周りの事柄について、自信をもって正確にやり取りを続けられる力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：スピーキングテストのルーブリック評価「質問力」「応答力」の観点でA評価の生徒の割合が、それぞれ全体の7割以上になる。

改善のための手立て

- 身近な話題について自分の考えや気持ちを伝え合う活動を繰り返し行えば、自信をもってやり取りできるようになるだろう。
 - ・週1回程度の帯活動で日常生活や身の回りの問題についてペアで話し合う活動に取り組みさせる。
 - ・フィールドトリップの計画をペアで協力して作成するなどの活動に取り組みさせる。
- 語順、時制などを明示的に指導すれば、正確な文の形でやり取りできるようになるだろう。
 - ・言語活動を通して疑問文の作り方や正しい答え方を指導する。
- スピーキングの方略指導を行えば、やり取りを続けられるようになるだろう。
 - ・難しい言葉を、中学レベルの英語で言い換える練習に取り組みさせる。
 - ・日本語独特の表現を、知っている単語を使って説明する練習に取り組みさせる。
 - ・相手の発話をリピートする、質問への答えにプラスワンのコメントをつけるよう指導する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数24）

内容：「How was your second semester?」から始まる会話で、第1回スピーキングテストと同様の方法で実施し、同じルーブリックで評価した。

結果：

	質問力	応答力	伝え方
A	20人 (83.3%)	16人 (66.7%)	24人 (100.0%)
B	4人 (16.7%)	8人 (33.3%)	0人 (0.0%)
C	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

平均ターン数：5.7回（最高ターン数8回、最低ターン数4回）

- ・第2回アンケート調査（12月実施：回答者数24）

1. 英語で言いたいことが以前（2学期の始め頃）より言えるようになったと思いますか。

大変思う	思う	どちらともいえない	思わない
5人 (20.8%)	15人 (62.5%)	4人 (16.7%)	0人 (0.0%)

2. 生徒同士のペアで会話すること・ネイティブスピーカーと会話することが以前（2学期の始め頃）よりできるようになりましたか。

大変できるようになった	少しできるようになった	どちらともいえない	できなくなった
4人 (16.7%)	17人 (70.8%)	3人 (12.5%)	0人 (0.0%)

3. 英語で会話することに対して以前（2学期の始め頃）より自信がつかまりましたか。

大変ついた	以前よりはついた	どちらともいえない	自信がない
3人 (12.5%)	15人 (62.5%)	5人 (20.8%)	1人 (4.2%)

4. 自由記述回答：

- ・単語の位置や文法を前よりちゃんと意識して文を作れていると思う。
- ・文法についてはある程度できるようになったので、スムーズに文が出てくるようにしたい。

<分析と考察>

第2回のテストの「質問力」でA評価の生徒の割合は83.3%となり、改善の目安とした7割を超えた。生徒の様子から、正確な疑問文を作ることができる生徒が増えたことが分かった。残念ながら、「応答力」でA評価の生徒の割合は66.7%で、改善の目安とした7割を達成することはできなかった。対応するデータについて検定（Wilcoxonの符号付順位検定）にかけたところ、「質問力」、「応答力」両方の項目で有意な向上が認められた（ともに $p=0.00<0.05$ ）。正確な文の形で応答できない生徒がまだ一定数いることが分かったので、引き続き指導が必要である。平均ターン数が、第1回の11.8回より第2回の5.7回に減少したのは、生徒が単語でなく、より長い文で会話をしようとしたためではないかと考察する。

第2回アンケートの結果から、英語で言いたいことが以前（2学期の始め頃）より言えるようになった（大変思う、思う）と回答した生徒の割合は83.3%、生徒同士のペアで会話すること・ネイティブスピーカーと会話することが以前（2学期の始め頃）より（大変、少し）できるようになったと回答した生徒の割合は87.5%、英語で会話することに対して以前（2学期の始め頃）より（大変）自信がついたと回答した生徒の割合は75.0%となっており、自信をもってやり取りを続けられる力が身に付いたことを多くの生徒が実感している。自由記述からは、語順や文法を意識して正確な文でやり取りを続けようとしていることが分かる。

教師の変化

ペアワークやグループワークでは、既習の言語材料を繰り返し使わせ、自分の考えを自分の言葉で表現させ、意味にフォーカスした活動をさせなければならないと考えるようになった。そのために、多様な場面や状況を設定して生徒がそれぞれの話題について、自分の言葉で表現できるような活動を工夫したいと考えるようになった。第2回アンケートの自由記述回答から、生徒が以前より文法を意識しながら会話をするようになったことが分かる一方で、思った単語がすぐに出てこなかった、相手の言うことをもっと聞き取れるようになりたいなどのコメントもあり、多くの課題を残しているため、更なる指導が必要であると思う。

今後の課題（次の改善点など）

第2回のテストでは、質問力には向上が見られたが、応答力に関しては文法上の誤りが見られた。また、リスニング力と語彙力に問題がある、思ったことがすぐに出てこない、という感想を持った生徒も多くいたため、今後はそれらの向上に取り組んでいこうと思った。

まとめ・感想

データ収集により生徒の現状を把握し、必要な手立てを考えるというプロセスは、効果的な指導のために必須だと思えるようになった。今後はリサーチを離れても、アンケートその他の方法で生徒の現状を把握し、手立てを考え、結果を確認するというプロセスは続けていきたいと考えている。

授業改善にあたって参考にした資料等

泉恵美子・門田修平（編著）.（2016）.『英語スピーキング指導ハンドブック』大修館書店.

文法的正確性を高め、自信を付けるスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	-----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は1学年2クラス72名（男子39名、女子33名）の生徒である。勉強に対して苦手意識を抱いている生徒は多いが、中学校での既習事項は復習すれば十分思い出すことができる。授業においては、間違いを恐れずに多くの生徒が発言したり、積極的にペア・グループ活動を楽しんでいたりする様子が見受けられる。卒業後は例年9割の生徒が大学・短期大学・専門学校への進学を希望しているが、一般受験で進学する生徒はかなり少なく、大半が指定校推薦等の推薦制度を利用して進学している。

解決すべき課題

生徒たちはペアワークが好きで、会話活動に楽しそうに取り組む。しかし使われている英語表現は正しいとは言えず、文ではなく単語レベルでのやり取りになってしまったり、自分の思いをうまく英語にすることができなかつたりすることが多い。正しい文の形で会話を行える力を生徒に身に付けさせたい。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・事前アンケート（4月実施：回答者数71）

1. どんなときに「英語の勉強が楽しい」と感じますか。

会話で意思疎通ができたとき	正しく文を書けたとき	英文を読んで正しく理解できたとき	テストでたくさん点数をとれたとき	その他
27人(38.0%)	5人(7.0%)	14人(19.7%)	20人(28.2%)	5人(7.0%)

2. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（3つまで回答可）

聞く力	読む力	話す力	書く力	単語や熟語	文法
38人(53.5%)	31人(43.7%)	45人(63.4%)	30人(42.3%)	26人(36.6%)	32人(45.1%)

3. あなたの英会話力は、どれぐらいのレベルだと思いますか。

正確な文の形でやり取りができる	単語レベルの発言でなら会話できる	発言するが、うまく相手に伝わらない	ほとんど発言することができない
8人(11.3%)	32人(45.1%)	21人(29.6%)	10人(14.1%)

<分析と考察>

「英会話で意思疎通ができたときに楽しいと感じる」生徒は38.0%おり、「テストで点数が取れたときに楽しいと感じる」生徒を10ポイント近く上回り、一番多かった。それを裏付けるように、「英語を話す力を身に付けたい」と考えている生徒は63.4%と、全体の半数以上を占めた。その一方で、自分の英会話レベルを「正確な文の形でやり取りができる」と感じている生徒は11.3%しかおらず、

「発言するが、うまく伝わらない」「ほとんど発言することができない」と感じている生徒を合わせると43.7%となる。「英語を話せるようになりたいが、うまく話せない」又は「自分の英語がうまく伝わらない」と、話す力に自信を持っていない生徒が半数近いことがわかる。

・第1回会話テスト（5月実施：受験者数71）

テスト内容：生徒同士のペアで、指定された疑問文（“What did you eat last night?” “What’s your hobby?” などの平易なもの）から始めて2分間、自由に会話をする。

評価方法：自作ループリックによる評価（教員および自己評価）

	質問力	応答力	話し方	自信（自己評価）
A	正確な文の形で質問している。	正確な文の形で応答している。	声の大きさ・明瞭さ・話す速度が適切であり、強調・繰り返し等、聞き手の理解を促す工夫をしている。	自信をもってやり取りをすることができた。
B	正確な文の形にはなっていないが、単語を並べて質問している。	正確な文の形にはなっていないが、単語を並べて応答している。	声の大きさ・明瞭さ・話す速度が適切である。	どちらかと言えば自信をもてた。
C	ほとんど何も質問することができない。	ほとんど何も応答することができない。	声の大きさ・明瞭さ・話す速度が適切でない。	自信がもてなかった。

結果：

	質問力	応答力	話し方	自信（自己評価）
A	4人(5.6%)	9人(12.7%)	1人(1.4%)	16人(22.5%)
B	28人(39.4%)	50人(70.4%)	58人(81.7%)	32人(45.1%)
C	39人(54.9%)	12人(16.9%)	12人(16.9%)	23人(32.4%)

<分析と考察>

「応答力」においてA評価を受けた生徒は20%に満たず、「質問力」「話し方」においてもA評価を受けた生徒はそれぞれ5.6%、1.4%と非常に少なかった。また、「応答力」でB評価を受けた生徒は70.4%で、A評価の12.7%と合わせると8割近いのに対し、「質問力」でB評価を受けた生徒は39.4%で、A評価と合わせても45.1%と少ない。生徒にとっては、答えることよりも尋ねることのほうが難しいということや、(相手に質問して)話を広げることが難しいということが分かる。また、「自信」においては、B以上の評価をしている生徒が7割近くいたが、32.4%と決して少なくない数の生徒がC評価となっており、自分の英語に自信を持っていないことが分かる。

リサーチ・クエスチョン

自信をもって、正確に、英語でやり取りする力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。
 改善の目安：・会話テストで、「質問力」の評価項目でB評価以上になる生徒の割合が全体の7割以上、「応答力」「話し方」でA評価になる生徒がそれぞれ全体の6割以上になる。
 ・会話テストの自己評価（評価項目「自信」）で、B評価以上になる生徒の割合が全体の9割以上になる。

改善のための手立て

○英語で会話する活動を積み重ねれば、英語で会話することに慣れ、自信をもってやり取りをすることができるようになるだろう。

- ・毎授業、最初の2分間、ペアで会話をする時間を与える。
- ・活動するペアを毎回変えて繰り返し行わせることで、よりスムーズな発話を目指す。
- ・「生徒にとって身近なこと」「教科書で学習したことに対する自分の考え」など、生徒が話しやすいテーマを用意する。
- ・活動に対してフィードバックすることで、自信を付けさせる。

○音声や言語形式を意識して活動させれば、正確にやり取りできるようになるだろう。

- ・主語＋動詞の形でやり取りするように、フィードバックを行う。
- ・質問の仕方、答え方について、フレームを与える。
- ・毎時間、活動の中で特にフォーカスする文法事項を変える。
- ・気になったエラーを全体で共有することで、自らの表現の見直しをさせる。
- ・教科書の音読の中で、音声指導を行う。
- ・ALTとのモデル会話を聞かせ、英語らしい音声に触れさせる。
- ・普段の会話活動の中で、リズムや強弱、イントネーションについてのフィードバックを行う。

○会話特有の表現を明示的に指導すれば、スムーズに自信をもってやり取りができるようになるだろう。

- ・相槌の表現など、会話を円滑に運ぶ表現を学習させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回 会話テスト（12月実施：受験者数71）※テスト内容・評価方法は第1回と同じ

結果：

	質問力	応答力	話し方	自信（自己評価）
A	24人(33.8%)	44人(62.0%)	19人(26.8%)	28人(39.4%)
B	46人(64.8%)	27人(38.0%)	52人(73.2%)	34人(47.9%)
C	1人(1.4%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)	9人(12.7%)

<分析と考察>

「質問力」「応答力」においては、改善の目安を大きく超えて達成することができた。それぞれの比較データを検定（Wilcoxonの符号付順位検定）にかけたところ、統計学的に有意な向上が認められた（ともに $p=0.00<0.05$ ）。特に「質問力」については、C評価が54.9%から1.4%と大幅に減少し、A評価は5.6%から33.8%と伸びが大きく、成長が顕著であった。しかしやはり半数以上の生徒が単語のみの質問（B評価）に留まっていることが分かる。第1回と比べて、相手に対する質問自体は遥かに多くできるようになったが、それが文法的に正しいレベルには到達していない。疑問文を作るには、語

順の入れ替えや語形変化などを瞬時に行わなければならないため、平叙文よりも難しいのだと推測される。

「話し方」と「自信」(自己評価)については、有意な伸長は認められたものの(ともに $p=0.00<0.05$)、改善の目安には届かなかった。だが、「話し方」については、C評価が0人になるなど、緩やかではあるが確実な成長がうかがえる。また、生徒からの事後アンケートに「場数を踏むことで成長を感じられ、自信がついた」といったコメントが多数寄せられた。これらのことから、このままこの活動を改良しつつ継続すれば、今後さらなる向上が見られるのではないかと予想する。

教師の変化

今までの自分の授業は、「生徒が楽しんでくれるだろうから、この活動を取り入れよう」という意識を基に行ってきた部分がある。だが今回の研究を通して、「この力を生徒に身に付けさせるために、この活動を取り入れよう」と、目的意識を持って授業をデザインするようになった。

また、今回初めて自作のルーブリックを使用してパフォーマンステストを実施し、その有用性に気付くことができた。今後も活用していきたい。

今後の課題(次の改善点など)

今回、緩やかな成長は認められるものの、「話し方」の項目で改善の目安を達成することができなかった。教科書音読時の音声指導が不十分であったことや、クラスによってはスケジュールの関係でALTとのチームティーチングの機会が少ないなどして、ネイティブの話す英語に触れる機会が限られていたことなどが、原因として考えられる。来年度は、「今回の音読ではここを意識しよう」と指導項目を明確にし、音声指導を多く取り入れたり、実際にネイティブが発音する英語に触れる機会を意識的に増やすなどして、指導法を改善しつつ活動を継続して行い、生徒の「話す力」の向上を図りたい。

まとめ・感想

教員生活を送る中で自分の授業のルーティンができ上がり、それをこなすだけの日々になっていたことに、この1年間で気付いた。この研究が始まる前に生徒たちに「あなたたちには、素晴らしい英語話者になってもらいたい」と自分の思いを伝え、その上で研究・授業改善を進めた。生徒たちは、私の期待に応じてくれた。熱い思い・理想を抱いていた初任のころの気持ちを思い出すことができた。これからも、初心を忘れず、教育者として熱い想いをもち続けたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

浅野雄大・芹澤和彦(編著)。(2021)、『中学校・高等学校 4技能5領域の英語言語活動アイデア』 明治
図書出版。

田尻悟郎(著)。(2009)、『(英語) 授業 改革論』 教育出版。

伊東治己(編著)。(2008)、『アウトプット重視の英語授業』 教育出版。

自信をもって英語でやり取りする力を伸ばすためのスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3年生3クラス98名（男子53名、女子45名）の生徒である。全体的に英語に苦手意識を持っている生徒が多く、基礎的な英語力が不足しているため、英語でやり取りすることに消極的な生徒が多い。対象の7割の生徒が、学校型推薦選抜または総合型選抜等を利用し4年制大学か専門学校への進学を希望している。就職を希望している生徒もいる。

解決すべき課題

定期的にスピーキングテストを行うなど英語を話す場面は設定してきたが、基本的な語彙や言い回しが身に付いていないため、自信をもって英語でやり取りすることができない様子がある。スピーキング活動の場면을多く作り、英語を話すことに慣れさせていくのに加え、自信をもって自分の言いたいことを適切に表現するための指導をしていきたい。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回アンケート（5月実施：回答者数95）

あなたは自信をもって自分自身のことや身の回りのことについて英語で話せますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
2人(2.1%)	3人(3.2%)	30人(31.6%)	60人(63.2%)

<分析と考察>

「どちらかといえば」を合わせると、全体の9割以上の生徒が、「自信をもって自分自身のことや身の回りのことについて英語で話すことができない」と回答した。これまでインタビュー形式のスピーキングテストやスピーチテストなど、事前に準備することのできるテストは行ってきているのだが、話すことについての自信は持っていない生徒が多い、ということが分かった。目的・場面・状況に応じたやり取りの練習を増やし、知識を増やすことで、より自信をもって話せるよう指導していく必要がある。

・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数95）

テスト内容：1分間の会話テスト。留学生のJoeに自己紹介をし、Joeの趣味、好きな食べ物、

行ってみたい場所などを聞き、おすすめのレストランやスポットなどを紹介する。

評価方法：自作のルーブリックによる評価

	質問力	応答力	話し方
A	正確な文の形で質問している。	正確な文の形で応答している。	声量、明瞭さが適切であり、相槌などを適切に使い、スムーズなコミュニケーションができています。
B	正確な文の形にはなっていないが、相手が理解できる英語で質問している。	正確な文の形にはなっていないが、相手が理解できる英語で応答している。	声量、明瞭さが適切である。
C	何も質問することができない。	何も応答することができない。	声量、明瞭さが適切ではない。

結果：

	質問力	応答力	話し方
A	4人 (4.2%)	7人 (7.4%)	10人 (10.5%)
B	50人 (52.6%)	53人 (55.8%)	60人 (63.2%)
C	41人 (43.2%)	35人 (36.8%)	25人 (26.3%)

<分析と考察>

「質問力」「応答力」とともにA評価の生徒は1割もおらず、約5割の生徒が単語での質問・応答（B評価）で、何も質問・応答することができない生徒も約4割（C評価）という結果になった。質問が思いつかず、教師の方から質問したりやり取りが継続できるような働きかけを行わないと、会話が止まってしまうという生徒も多かった。スピーキングテスト後の生徒のコメントでは「質問をするための文の作り方が分からない」「そもそも自分が何を聞かれたのかが分からないため、応答することができない」などの記述が多く見られた。

以上のことから、言いたいことを表現するための基本的な語彙や言い回しを明示的に指導し、スピーキング活動の中でそれらの知識を繰り返し使うこと、目的・場面・状況を設定した会話練習を行い、様々な表現を身に付けさせることを重点的に指導していきたいと考えた。

リサーチ・クエスチョン

自信をもって自分自身のことや身の回りのことについて、正確な文で話す力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・アンケートで、「自信をもって自分自身のことや身の回りのことについて英語で話すことができる」「どちらかといえばできる」と回答する生徒の割合が全体の7割以上になる。
 - ・スピーキングテストのそれぞれの項目で、B評価以上の生徒の割合が全体の8割以上になる。

改善のための手立て

- プレスピーキング活動を工夫すれば、自信をもって正確な文の形でやり取りができるようになるだろう。
 - ・ 支援として、話すテーマに必要な語彙や文法について指導する。
 - ・ ALTとの会話の映像を見せるなどコミュニケーションの場面のイメージを持たせるようにする。
 - ・ 相手の発言に対するリアクションの取り方など、会話に特有な表現を指導する。

- ポストスピーキング活動を工夫すれば、自信をもって正確な文の形でやり取りができるようになるだろう。
 - ・ ペアワークが終わった後に言語的な振り返りを行い、次の活動につなげる。
 - ・ 事前に指導した表現や、相手の発話から学んだ語彙を、活動後に記録させる。
 - ・ 事前にループバックを示した上で相手の発話を注意深く聞くように指導し、活動後に生徒同士でお互いのパフォーマンスを評価させる。

- 目的・場面・状況を設定した会話練習の数を増やせば、英語で話すことに慣れ自信をもって正確に話せるようになるだろう。
 - ・ 毎回の授業でペアワークを継続的に行う。
 - ・ Target 文法を使用した会話練習を複数回行う。
 - ・ 期間を置いて再度同じような言語活動を行い、学習した知識の定着を図る。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 第2回アンケート（12月実施：回答者数84）

あなたは自信をもって自分自身のことや身の回りのことについて英語で話せますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
22人 (26.2%)	31人 (36.9%)	14人 (16.7%)	17人 (20.2%)

<分析と考察>

「どちらかといえば」を合わせると63.1%の生徒が「自信をもって話すことができる」と回答し、改善の目安の7割を超えることはできなかったが、第1回目と比較すると多くの生徒が自信をもって英語でのやり取りが行えるようになった。また統計学的にも有意な向上が認められた ($p=0.00<0.05$)。生徒のコメントでは「言いたいことを文で言えると自信が持てた」や「何度も話すことがスピーキング力を高めるのに必要と感じた」などの記述があり、継続的な会話練習が功を奏した。

- ・ 第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数84）

テスト内容：1分間の会話テスト。冬休み明けの1月にアメリカに帰国する留学生のJoeに、帰国

前最後に行ってみたい場所について尋ね、その場所についての情報を伝える。また、高校卒業後に自分が何をしたいか、Joe が何をしたいのかの意見交換をする。

評価方法：第1回スピーキングテストと同じ。

結果：

	質問力	応答力	話し方
A	28人(33.3%)	46人(54.8%)	55人(65.5%)
B	37人(44.0%)	31人(36.9%)	26人(31.0%)
C	19人(22.6%)	7人(8.3%)	3人(3.6%)

<分析と考察>

「質問力」に関しては、8割以上の生徒がB評価以上の結果を示すという目標をわずかに超えることができなかったが、「応答力」「話し方」の項目では9割以上の生徒がB評価以上の結果を示し、改善の目安を達成することができた。事前、事後の評価がそろっている82人について比較データを検定にかけたところ、統計学的にも有意な向上が認められた(いずれも $p = 0.00 < 0.05$)。またスピーキングテスト後に行ったアンケートでは、スピーキング活動前に、話すテーマに合わせて必要な語彙や文法を指導したことや、毎回の授業でペアワークを継続的に行ったことが効果的だったと回答した生徒が多くおり、手立てが生徒の英語でやり取りする力の向上に有効であったことが分かった。

教師の変化

1年間の見通しを持って生徒に身に付けさせたい力に合わせて手立てを考え、授業実践に取り組むことで、生徒の成長と変化を確かなものとして実感することができた。このアクション・リサーチを通して、生徒が楽しいと感じる授業を作ることに加えて、確かな力が身に付いたと感じさせられる授業を作ることにつながったと感じている。

今後の課題(次の改善点など)

英語でやり取りする力を身に付けさせるためには、話す力に加えて聞く力も向上させていかなければならないということを感じた。今後はどちらのスキルもバランスよく高めていけるような授業を作り、実践していきたいと考えている。

まとめ・感想

1年間の取組を通して自分自身の授業を見直し、改善することができた。またそれが生徒の成長にもつながるということを実感できた。今後は新たに見えた課題に自分自身で取り組むのと同時に、同僚とも協力しながら、学校全体、ひいては神奈川県英語教育という大きな枠組みの中で授業改善に貢献できるよう努めていきたいと考えている。英語を学ぶことを通して、より多くの生徒が明るい未来を手にすることができることを願っている。

論理的に自分の意見を伝えるスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2学年の3クラス116名（男子60名、女子56名）の生徒である。ほとんどの生徒が英語学習に前向きで、熱心に授業を受けている。ペア活動やグループワークも積極的に参加する。例年、多くの生徒が4年制大学への進学を希望し、難関国公立大学を志す生徒も多い。

解決すべき課題

自分の意見を相手に伝える活動では、言いたいことをなかなか英語で表現できなかつたり、相手にとって分かりやすい主張ができていなかたりする生徒が多くいる。また、多くの生徒が、自分の意見を効果的に伝えることができていない。生徒たちは英語での発表にあまり自信を持っていない様子なので、この課題を解決する必要があると感じた。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート調査（4月実施：回答者数112）

質問：自分の意見を英語で伝えることができますか？

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
4人(3.6%)	39人(34.8%)	60人(53.6%)	9人(8.0%)

<分析と考察>

アンケートの結果より、自分の意見を英語で伝えられると感じている生徒（「かなりできている」「まあまあできている」と答えた生徒）の割合は38.4%であった。また自由記述欄には、「すぐに言葉が出てこない」などのコメントも見られ、自分の意見を英語で表現することに困難さを感じている生徒が多いことが分かった。このことから、スピーキングの技能の育成に重点を置くことにした。

- ・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数108）

テスト内容：外国人に向けて、有名な日本人を紹介する。その際、次の①～④の4点を含める。

- ① Job / Background：その人がどのような職業についているのかなど、関連する背景知識
- ② What he/she did：その人がどのくらい凄いのかを伝えるエピソード
- ③ What he/she is like：その人の人柄を伝えるエピソード
- ④ Your opinion：その人に対する評価や感想などの意見（②か③またはその両方を踏まえる）

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	内容と構成	伝え方と流暢さ	発音
S	Aに加えて、内容において聴衆の注意を惹きつける工夫が見られる。	Aに加えて、伝え方において聴衆の注意を惹きつける工夫が見られる。	全体的に、英語の音の特徴（リズム、アクセント、個々の音素や音声変化など）で話している。
A	①～④の内容が十分に述べられており、ディスコースマーカ―を用い、それぞれのポイントが適切につなげられている。	アイコンタクトが取れており、聞き取りやすい声の大きさと速度で話している。不要な繰り返しや言い直しがなく、適切に間がとれている。	英語の音の特徴（リズム、アクセント、個々の音素や音声変化など）を意識して話そうとしており、おおむね英語として理解できる。
B	①～④の内容について触れられており、概ね十分に述べられているが、ディスコースマーカ―の誤用、不必要な使用、単調さが見られる。	視線が聴衆以外のものに向くことがあるが、相手に伝えようとする努力が見られる。また、聞き取りづらさや、不要な繰り返し、不自然な間があるものの、概ね発表内容を理解できる。	英語として理解しにくい（カタカナ読み）部分があるものの、英語の音の特徴（リズム、アクセント、個々の音素や音声変化など）を意識して話そうとしている。
C	①～④のうち、触れられていない内容がある。	視線が聴衆以外のものに向き、聞き取りづらさや、不要な繰り返し、不自然な間があり、発表内容を理解しにくい。	全体的に、英語として理解しにくい音声になりがちである。

結果：人数（％）

	内容と構成	伝え方と流暢さ	発音
S	0人(0.0%)	1人(0.9%)	4人(3.7%)
A	48人(44.4%)	48人(44.4%)	64人(59.3%)
B	52人(48.1%)	59人(54.6%)	40人(37.0%)
C	8人(7.4%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

<分析と考察>

「内容と構成」のA評価は、44.4%に留まった。過半数の生徒は、①～④の内容について触れて発表することはできていたが、ディスコースマーカ―を用い、それぞれのポイントを適切に繋げることや、事実と意見を区別して伝えることに課題があった。「伝え方と流暢さ」のS評価とA評価は、45.4%にとどまり、過半数の生徒は、資料から目を離して聞き手とアイコンタクトを取ることや、聞き取りやすい声の大きさと速度で話すことができていなかった。「発音」のS評価とA評価は、63.0%に留まり、カタカナ発音でない自然な英語で話すことに課題があった。

リサーチ・クエスチョン

日常的な話題について、意見や考えを論理的に、理解しやすい話し方で発表する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：スピーキングテストの3つの観点それぞれにおいて、S・A評価を得る生徒の割合が第1回よりも20ポイント以上増える。

改善のための手立て

○ 表現や構成を明示的に指導し、使う機会を十分に与えれば、意見や考えを論理的に発表できるようになるだろう。

- ・教科書の表現を自分の言葉で言い換える活動を行い、使用できる語彙が増えるよう指導する。

- ・英文を読み、意見や事実を選ぶ活動を行い、意見と事実を区別できるよう指導する。
 - ・グラフから読み取った事実を基に書く活動を行い、自分の意見を事実でサポートできるよう指導する。
 - ・教科書の内容に関連するトピックでディベート活動を行い、意見を論理的に伝えられるよう指導する。
 - ・教科書で習ったプレゼンテーションの表現や構成を参考にしながら、意見を書く活動を行い、表現や構成が定着するように指導する。
- 効果的な発表の仕方や、英語の音声の特徴を明示的に指導すれば、理解しやすい話し方で発表できるようになるだろう。
- ・英語での発表の仕方のコツを紹介する動画を使って、効果的な伝え方を指導する。
 - ・原稿をなるべく見ずにペアで会話させ、アイコンタクトしながら伝えられるよう指導する。
 - ・音声変化を説明する動画を見せた後リスニング問題に取り組みせ、スクリプトと音声を確認する活動を行い、英語の音の特徴を明示的に指導する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数113）

テスト内容：外国人に向けて、日本の文化を紹介する。その際、次の①～④の4点を含める。

- ① What it is : それがどのようなものか
- ② The way it is accepted in Japan : 日本でどのように受け入れられているか
- ③ The way it is accepted outside Japan : 海外ではどのように受け入れられているか
- ④ The reason you recommend it : どうしてそれを薦めるか

結果：人数（％）

	内容と構成	伝え方と流暢さ	発音
S	5人 (4.4%)	4人 (3.5%)	5人 (4.4%)
A	73人 (64.6%)	75人 (66.4%)	102人 (90.3%)
B	29人 (25.7%)	34人 (30.1%)	6人 (5.3%)
C	6人 (5.3%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

<分析と考察>

それぞれの項目で、S、A評価の生徒の割合は合わせて、「内容と構成」は44.4%から69.0%、「伝え方と流暢さ」は45.4%から69.9%、「発音」は63.0%から94.7%に向上し、それぞれ20ポイント以上増えるという改善の目安に達した。第1回と第2回のそれぞれのデータを検定（Wilcoxonの符号付順位検定）にかけたところ、統計学的に有意な向上が見られた（いずれも $p=0.00<0.05$ ）。

・第2回アンケート調査（12月実施：回答者数113）

発表する力の向上のために行った手立てを列挙し、その中のどれが効果的だと感じたかを一つ以上選択させた。次の表は、評価した生徒の割合が多い活動内容を整理したものである。

活動内容	評価した生徒の割合
音声変化を説明する動画を見る活動	64.9%
ディベート活動	54.3%
教科書で習ったプレゼンテーションの表現や構成を参考にしながら、意見を書く活動	48.9%
原稿をなるべく見ずにペアで会話をする活動	43.6%
リーディングで意見や事実を選ぶ活動	43.6%
グラフから読み取った事実を基に自分の意見を書く活動	34.0%

<分析と考察>

リスニングの問題に関連する「音声変化を説明する動画」を視聴したことが効果的であったと回答した生徒の割合が一番高かった。ただ音を聞く、真似るだけではなく、説明を聞いて納得することで、理解が深まったことがわかる。続いて「ディベート活動」が挙げられ、実際に活動を行うことで、伝え方のスキルが上達していったのだと思われる。また、「教科書で習った表現を使って意見を書く活動」について選択した生徒も5割近くおり、書く活動が、意見を効果的に話して伝える力の向上に寄与したことがわかる結果となった。

教師の変化

- ・ 単元ごとに見通しをもって指導計画を立てる意識が高まった。
- ・ 生徒が抱える課題に対して、自信をもって適切な手立てをとることができるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

教科書本文を活用して、自分の意見を表現する指導をこれからも追及していきたい。

まとめ・感想

アクション・リサーチを行うことで、単元ごとに育成したい力を考え、そのためにどの授業でどのような指導を行うか見通しを持って進めることができるようになった。また、様々な教授法を学ぶことで、課題に対して適切なアプローチを選ぶことができるようになった。今後も生徒の課題を的確に把握し、それに対してどのような手立てが有効かを考えながら授業をデザインしていきたい。最後に、この貴重な研修の機会を提供して下さった講師の先生方、様々な面で相談に乗ってくれた同僚の先生方、そして自分の授業に真摯に向き合ってくれた生徒の皆さんに心から感謝を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐々木啓成. (2020). 『リテリングを活用した英語指導 理解した内容を自分の言葉で発信する』大修館書店

YouTube. (2023). ArtofSmartTV. <https://www.youtube.com/watch?v=WufMj1xHX30&t=14s>.

YouTube. (2023). 『あいうえおフォニックス』英語発音. <https://www.youtube.com/@aiueophonics>.

I C T機器を活用しながら英語で発表する力を養う指導

科目名	英語コミュニケーションⅡ	学年	2・3年	形態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	----	------	----	---

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は定時制高等学校の1クラス、32名（男子13名、女子19名）の生徒である。日常的に英語を使う外国につながるのがある生徒や、英語に対する苦手意識の強い生徒など、生徒の習熟度の差は大きいですが、皆前向きに授業に取り組んでいる。卒業後に関しては就職から大学進学までと多岐に渡る。

解決すべき課題

英語力に自信を持たず、英語に対してネガティブな気持ちを抱える生徒が多い。そのため、日々の活動から成功体験を積み重ねて自信を持たせ、英語を使って発表ができるように指導していく必要がある。また、日本語であっても対面でのコミュニケーションが苦手であったり、教員側からの活動の指示が理解できなかつたりと、英語面以外でも様々な課題を抱えている生徒が多くいることもあり、活動や指示を工夫し、生徒の能力を最大限に伸ばすことのできる学習環境を整える必要がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回 英語の授業にかかわるアンケート（4月実施：回答者数30）

Q1：英語を話す力はこれからの生活の中で必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
22人(73.3%)	7人(23.3%)	1人(3.3%)	0人(0.0%)

Q2：英語を使って発表することに抵抗はありますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	そう思わない
17人(56.7%)	11人(36.7%)	2人(6.7%)

Q3：人生において、I C T機器を使えるようになる必要はあると思いますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	そう思わない
22人(73.3%)	6人(20%)	2人(6.7%)

Q4：高校を卒業し、仕事をしていく中でプレゼンテーション能力は必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	そう思わない
21人(70%)	8人(26.7%)	1人(3.3%)

<分析と考察>

英語を話せるようになることの必要性は感じてはいるが、英語で発表することに抵抗がある生徒が93.4%と、多数を占めている。同様に、I C T機器を使えるようになる必要性を感じている生徒、

プレゼンテーション能力が必要だと考えている生徒も多いことが分かった。以上のことから、生徒がICT機器の力を借りて英語力を向上させ、自信をもって英語で発表ができるように指導していくことを決めた。

- ・事前テスト（5月実施：受験者数32人の内、制限時間内に提出した14人の評価を記載）

テスト形式：ノートパソコンを使って、2分以上4分以内のプレゼンテーションを作成し、提出する。スライドは6枚以上10枚以下で、制限時間は75分（準備45分、録音30分）。

テーマ：中学生に向けて、「この学校に来たい」と思わせるような学校紹介のプレゼンテーションを、学校の特徴を3つ以上含めて作成する。

評価方法：自作ルーブリックによる評価

	話し方	内容	正確さ	ICT
A	聞き手が十分理解できる速度・声量で話している。	与えられたテーマに沿った内容になっている。	内容伝達に支障をきたす誤り、語彙・文法の誤りが2つ以内に収まっている。	指定された条件をすべて満たしており、かつ、図表やスライドに工夫がみられる。
B	聞き手が概ね理解できる速度・声量で話している。	概ねテーマに沿った内容になっている。	内容伝達に支障をきたす誤り、語彙・文法の誤りが3つ以内に収まっている。	指定された条件を一部満たしていない。また、図表やスライドに工夫があまりみられない。
C	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。

結果：

	話し方	内容	正確さ	ICT
A	2人(14.3%)	7人(50.0%)	3人(21.4%)	2人(14.3%)
B	10人(71.4%)	3人(21.4%)	3人(21.4%)	10人(71.4%)
C	2人(14.3%)	4人(28.6%)	8人(57.1%)	2人(14.3%)

※全観点でB以上の評価が付いた生徒数14人中3人(21.4%)

<分析と考察>

全観点でB以上の評価を得た生徒は21.4%に過ぎず、発表する力全般に課題があることが分かった。今回は、英語の発表における成功体験を積むことによって、英語で話すことへの抵抗感を減らすことを最重要視し、まずは話し方とICTの観点について、重点的な指導をしていきたいと考えた。

リサーチ・クエスチョン

日常的な話題について自信をもって英語で発表する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・アンケートで「英語を話すことへの抵抗が（どちらかといえば）減った」と回答する生徒の割合が、全体の50%を超える。

- ・事後テストの「話し方」と「ICT」の観点でA評価が付く生徒の割合が全体の50%を超える。

改善のための手立て

- 表現・音声・文法を明示的に指導すれば、より質の高い発表ができるようになるだろう。

- ・音読を通じて、音声指導を行う。
- ・Youtube や Podcast、動画撮影を活用し、リスニングを含めた音声指導の充実を図る。
- ICT機器を使って英語で発表する練習を増やせば、話す力が向上するだろう。
 - ・本文の要約をスライド4枚で作成しペアやグループで発表させたり、グループでの会話練習を動画撮影し提出させたりする。
 - ・毎月指定されたテーマに沿ってプレゼンテーションを作成、グーグルクラスルーム上に提出させる（「Monthly Presentation」）。
- 個に応じた支援をすれば、前向きな姿勢になり、自信をもって英語で発表できるようになるだろう。
 - ・対面での発表に抵抗がある生徒が多いため、オンラインで発表、提出をさせ、抵抗感を和らげる。
 - ・困難を抱える生徒が、いつでもオンラインで見られる資料を、グーグルクラスルームで共有する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回 英語の授業に関わるアンケート(12月実施：回答者数 28)

Q1：4月に比べて、自分の英語力は伸びたと感じますか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
15人(53.6%)	12人(42.9%)	1人(3.6%)	0人(0%)

Q2：4月に比べて、自信をもって英語で発表できるようになりましたか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
12人(42.9%)	10人(35.7%)	4人(14.3%)	2人(7.1%)

Q3：4月に比べて、英語で話すことへの抵抗は減りましたか？

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
15人(53.6%)	9人(32.1%)	2人(7.1%)	2人(7.1%)

<分析と考察>

9割以上の生徒が「(どちらかといえば)自分の英語力が伸びた」と感じており、「(どちらかといえば)自信をもって英語で発表できるようになった」と回答した生徒の割合も9割近い。また、改善の目安としてあげていた「英語で話すことへの抵抗が(どちらかといえば)減った」生徒の割合については85.7%となり、目標の50%を大幅に超えることができた。肯定的な回答をした生徒は理由として、「英語の授業を通して、他の人と会話する機会が増えたから」「英語を使う時間が増えたから」「プレゼンテーションや会話を繰り返して英語を話すことに抵抗が無くなったから」というようなコメントをしており、「練習を増やす」手立てが効果的であったことが分かる。

- ・事後テスト（12月実施：受験者数 23 人の内、制限時間以内に提出した 20 人の評価を記載）

テスト形式、評価方法：プレテストと同じ。

テーマ：英語が嫌いな友人に向けて、「英語を学ぶメリット」についてのプレゼンテーションを、英語を学ぶメリットを3つ以上含めて作成する。

結果：

	話し方	内容	正確さ	I C T
A	13 人 (65.0%)	16 人 (80.0%)	7 人 (35.0%)	12 人 (60.0%)
B	7 人 (35.0%)	4 人 (20.0%)	7 人 (35.0%)	8 人 (40.0%)
C	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)	6 人 (30.0%)	0 人 (0.0%)

※全観点で B 以上の評価が付いた生徒数 20 人中 14 人 (70.0%)

<分析と考察>

目標とした「話し方」で A 評価となった生徒の割合は 65.0%、「I C T」は 60.0%と、改善の目安を達成することができた。また他の観点でも評価が向上し、「全観点で B 以上の評価が付いた生徒」の割合は 70.0%となった。両方のテストを受験した 10 人について比較データを検定 (Wilcoxon の符号付順位検定) にかけたところ、全ての観点で統計学的に有意な向上が認められた (いずれも $p = 0.00 < 0.05$)。今回の手立てが、生徒の全般的な英語で発表する力に効果があったと言える。

教師の変化

「一人一台端末を活用した英語力の向上」について、時間をかけて考え実践することができ、成果を上げることができた。年間を通して計画的に指導していくことの大切さを実感した。また同僚が同じ活動を授業に取り入れるなど、組織的な授業改善にも少なからず貢献することができたと考える。

今後の課題 (次の改善点など)

手立ての 1 つである「Monthly Presentation」の提出率が夏季休暇以降、下がってしまった。これはフィードバックが不十分であったことや、生徒の英語に対するモチベーションが下がってしまったことなど、いくつかの原因が考えられるので、今後の課題としていきたい。また、「正確さ」の観点を大幅に向上させることができなかったため、この点も指導方法を研究していきたい。

まとめ・感想

自身の授業を改善できたと同時に、英語教育についての知識を得ることができた。定時制の生徒の学力を伸ばすことができたことは、自分の中でも大きな自信となった。また、生徒からポジティブなコメントを多くもらうことができ、自分の信念に間違いはなかったのだと実感した。この結果に慢心することなく、今後も英語教師としての資質向上に努めていく。最後に、ここまで御指導いただきました指導主事の皆様、並びに共に研鑽をしてきた KCETT のメンバーに改めてお礼を申し上げます。

授業改善にあたって参考にした資料等

坂本良品. (2023). 『授業・校務が超速に！さる先生の Canva の教科書 基本から AI 活用まで！』学陽書房

菅正隆・松下信之. (2022). 『ペーパーテスト&パフォーマンステスト例が満載！高等学校外国語新 3 観
点の学習評価完全ガイドブック』明治図書出版株式会社

自分の意見を即興で話す力を育てるスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	-----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス 71 名（男子 22 名、女子 49 名）の生徒である。生徒は授業中与えられた課題に一生懸命取り組む。卒業後の進路については、例年約 7 割近くの生徒が大学への進学を希望している。

解決すべき課題

英語は好きだという生徒が比較的多く、ペアワークやグループワークにも積極的に参加しているが、おとなしい生徒が多いため、授業中に生徒が自発的に発話する場面は少ない。生徒が積極的に英語でコミュニケーションを取ろうとする姿勢を養うための授業内の工夫について、課題があると感じている。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第 1 回アンケート（4 月実施：回答者数 71）

1. 英語の授業でどのような力を伸ばしたいと思いますか。（複数回答可）

聞く力	読む力	話す力	書く力	語彙	文法
49 人 (69.0%)	24 人 (33.8%)	57 人 (80.3%)	24 人 (33.8%)	25 人 (35.2%)	22 人 (31.0%)

2. 英語で、どのようなことを話せるようになりたいですか。（複数回答可）

自分・家族・学校 などの紹介	身近な事柄に ついての説明	身近な話題に 関する意見	聞いたり読んだり したことへの意見	社会的な問題に 関する意見
18 人 (25.4%)	38 人 (53.5%)	34 人 (47.9%)	43 人 (60.6%)	5 人 (7.0%)

3. 英語の授業内容はどのくらい理解できていると思いますか。

ほぼ全部できている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
14 人 (19.7%)	42 人 (59.2%)	15 人 (21.1%)	0 人 (0.0%)

<分析と考察>

アンケートの結果から、英語を「話す力」を伸ばしたいと考えている生徒が最も多いことが分かる。具体的には、「聞いたり読んだりしたことへの意見」や、「身近な事柄についての説明」や、「身近な話題に関する意見」などについて、述べられるようになりたいと思っている。授業内容への理解度は約 8 割の生徒が「ほぼ全部／まあまあできている」と答えていることから、授業中の活動を工夫し発展させていくことで、生徒の授業への理解を深めるとともに生徒の英語力も伸ばしていくことができるのではないかと考えた。

・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数70）

テスト内容：生徒が教科書本文をリテリングしその内容についての意見を述べた後に、その内容についての教師からの質問に、即興で答える。

評価方法：自作ルーブリックによる評価

評価	応答力	デリバリー
A	質問を理解し、語彙・表現を適切に使って、質問に対する自分の考えを具体的に話している。	正しい発音とイントネーションで話している。声の大きさや速さが全体的確。
B	語彙・表現が不十分なため具体的に話していないが、質問を理解し、質問に対する自分の考えを述べている。	概ね満足できる発音とイントネーションで話している。つかえてしまうこともあるが、声の大きさや速さに大きな問題がない。
C	質問に対する自分の考えを述べようとしているが語彙・表現が不十分なため話していない、または質問を理解していない。	日本語発音で、イントネーションに問題がある。10秒以上止まってしまう。声の大きさや速さが不適切。

結果：

評価	応答力	デリバリー
A	11人 (15.7%)	14人 (20.0%)
B	46人 (65.7%)	52人 (74.3%)
C	13人 (18.6%)	4人 (5.7%)

<分析と考察>

「応答力」については、15.7%の生徒がA評価となった。B評価の生徒は、適切な表現が思い浮かず発話が止まってしまうたり、具体的に理由や例が示せず黙ってしまったたり、などの特徴がみられた。また、C評価の生徒は質問そのものが理解できなかったり、沈黙のままであったりした。「デリバリー」については、20.0%の生徒がA評価となった。B評価の生徒は、一部の語が日本語発音のために理解しづらかったり、日本語のつなぎ言葉が入ってしまったたりした。「もっと自分の言葉で説明したい」「自信がなく声量もところどころ小さくなってしまったので次はもう少し自信をもってやりたい」等自由記述欄に書く生徒もいた。このことから、生徒が学んだ内容を自分の言葉で表現し、自信をもって発言できるようになる授業を展開していく必要性を感じた。

リサーチ・クエスチョン

英語で自信をもって自分の考えを発表し、その内容についてやり取りができる力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・スピーキングテストの評価ルーブリックのそれぞれの観点で、A評価以上になる生徒の割合が全体の8割以上になる。

・アンケートで「4月と比べて英語を話すことに自信が持てるようになった」と回答する生徒の割合が全体の8割以上になる。

改善のための手立て

- 教科書本文の内容をリテリングする前に、自分の考えをまとめる活動を行えば、生徒は内容を深く理解し、主体的に自分の考えをまとめ、伝えられるようになるだろう。

- ・視覚教材やオーガナイザーで教科書本文の内容理解を深めてから、ペアやグループでスピーキング活動を行う。
 - ・話す前に自分の考えを整理するためのライティング活動を行う。
- 英語をアウトプットする機会を増やせば、英語を話すことに慣れ自信をもって自分の考えを伝えられるようになるだろう。
- ・アウトプット活動の難易度を段階的に上げたり、ペアを交代したりして飽きずに練習する機会を多く持つ。
 - ・学習した語彙や表現を適切に使って教科書本文のリテリングをレッスンごとに行う。
- 適切なフィードバックを行えば、生徒は自分の発話を改善していくことができ、適切に自分の考えを伝えられるようになるだろう。
- ・ペア活動での発話練習の後に、内容についての気づきを生徒同士でコメントしあう機会をもつ。
 - ・リテリングのあとに教員からもフィードバックを意識的に行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第1～4回スピーキングテスト（5～12月実施：受験者数70）

応答力

	第1回(5月)	第2回(7月)	第3回(10月)	第4回(12月)
A	11人(15.7%)	12人(17.1%)	28人(40.0%)	56人(80.0%)
B	46人(65.7%)	42人(60.0%)	42人(60.0%)	14人(20.0%)
C	13人(18.6%)	16人(22.9%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

デリバリー

	第1回(5月)	第2回(7月)	第3回(10月)	第4回(12月)
A	14人(20.0%)	9人(12.9%)	21人(30.0%)	63人(90.0%)
B	52人(74.3%)	58人(82.9%)	49人(70.0%)	7人(10.0%)
C	4人(5.7%)	3人(4.3%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

- ・第2回アンケート（11月実施：回答者数70）

英語の授業内容はどのくらい理解できていると思いますか。

ほぼ全部できている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
16人(22.9%)	42人(60.0%)	11人(15.7%)	1人(1.4%)

- ・第3回アンケート（12月実施：回答者数68）

4月と比べて英語を話すことに自信が持てるようになりましたか。

とてもあてはまる	あてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
21人(30.9%)	38人(55.9%)	8人(11.8%)	1人(1.5%)

<分析と考察>

第4回スピーキングテストにおいて「応答力」「デリバリー」でA評価を得た生徒の割合はそれぞれ

80.0%、90.0%と、第1回の結果と比べて顕著な増加を示し、改善の目安を達成することができた。70名のデータについて検定（Wilcoxonの符号付順位検定）を行ったところ、二項目ともに有意な向上が認められた（ともに $p = 0.00 < 0.05$ ）。授業内容の理解度を「ほぼ全部／まあまあできている」と答えた生徒の割合は第1回の78.9%から82.9%に増え、内容理解が発話内容の質の向上につながったのではないと思われる。スピーキングテストも手立ての一つとしてとらえ、「練習→スピーキングテスト→振り返り」を繰り返すことで、生徒は目標を確認したり、次回への改善点を明確にしたりすることができた。教員もフィードバックの機会を多く持つことでよりの確な指導を行うことができた。

「自信」についても、86.8%の生徒が「4月と比べて英語を話すことに自信が持てるようになった（とてもあてはまる／あてはまる）」と回答し、改善の目安を達成できた。第1回スピーキングテストの頃は、自信のなさからか声が小さくなったりすぐ日本語に戻ったりする生徒が多かったが、回を重ねるにつれて自然に発話できるようになった。スピーキングテストを繰り返すことで、だんだんと自信をつけることができたのではないと思われる。

教師の変化

- ・教材研究、特に視覚教材を丁寧に作るようになり、教材を通して生徒と英語でやり取りする機会が増えた。
- ・生徒が英語での指示や説明を理解していない時に、すぐに日本語に置き換えるのではなく、視覚教材や他の語への言い換えで生徒が英語のまま理解するという場面を増やすようになった。
- ・生徒が授業中に発話しやすい発問や設定を増やすようになった。また、生徒の発話に対して必ず受け止める、または感謝の意を示してから発言の内容に触れるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

一生懸命授業に取り組む生徒に助けられて今回の取組では一定の成果が得られた。これからは授業外でも生徒が自発的に取り組んでいけるような働きかけも並行して行っていきたい。

まとめ・感想

研修を通して自分や自分の生徒が抱える課題に焦点を定めその改善策を考えて実施していくことで、効果的な授業を展開していく経験ができた。生徒と一緒に目標に向かう一体感のようなものを体験することができ、非常にやりがいを感じた。また、研修中の他校の先生方との情報共有や共同作業はとても刺激のかつ有意義であった。今後も、常に学習者としての立場から生徒にも学ぶ喜びを伝えていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

金谷憲（編著）（2011）.『高校英語授業を変える！訳読オンリーから抜け出す3つの授業モデル』アルク.

胡子美由紀.（2020）.『中学英語 生徒が対話したくなる！発問の技術』学陽書房.

瀧沢広人.（2023）.『言語活動が充実する！対話でつくる英語授業』学陽書.

自分の言葉で要約をするためのライティング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	---------------	----	---	----	---

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス76名（男子22名、女子54名）の生徒で、農業科と商業科の混合クラスである。ペアワークやグループワークを楽しむ姿が見られ、授業に向かう姿勢はある。しかし、中学校レベルの基本的な英語力が定着していない生徒や、英語に苦手意識を持つ生徒も少なくない。例年約7割の生徒が進学をするが、進学のために一般入試を受ける生徒はほとんどおらず、推薦型選抜で大学・短大・専門学校へ進学する生徒が多い。

解決すべき課題

英文を読むことは、一文一文、日本語に訳すことだと思っている生徒が多く、パラグラフ毎の要点や全体のメッセージなどを捉えようとする意識は高くないように見える。また、まとまった文を書くことに慣れておらず、ある程度の語数をもって書くことができていない。概要や要点をつかむという目的意識を持って英文を読み、理解したことを自分の言葉で書いて伝えることができるよう、適切に書く力を身に付けさせたい。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回アンケート（5月実施：回答者数75）

1. 英語の4技能の中で、最も得意と感じているものはどれですか。

聞く力	読む力	話す力	書く力
20人(26.7%)	34人(45.3%)	6人(8.0%)	15人(20.0%)

2. 初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識していますか。

かなり意識している	まあまあ意識している	あまり意識していない	ほとんど意識していない
4人(5.3%)	38人(50.7%)	30人(40.0%)	3人(4.0%)

・第2回アンケート（6月実施：回答者数64）

読んだことや聞いたことについて、英語で概要や要点を書くことができますか。

書ける	どちらかといえば書ける	どちらかといえば書けない	書けない
3人(4.7%)	23人(35.9%)	27人(42.2%)	11人(17.2%)

<分析と考察>

4技能の中で最も得意と感じているのは読む力と答えた生徒が一番多く（45.3%）、筆者の主張や

大切だと思われる文に注目している生徒も多かった (56.0%)。しかし、「読んだことや聞いたことについて、英語で概要や要点を書くことができますか」という問いに対しては、約6割の生徒が否定的な回答をしていた。英文を読んで概要や要点を掴むことは意識できていても、それを書いて伝える力については自信が持てず、課題があるということが分かった。

・第1回英作文テスト (5月実施：受験者数71)

テスト内容：15分間で既習の教科書本文の1つの単元を読んで、その要約を英語で書く。

評価方法：自作ルーブリックによる評価

	内容	正確さ
A	要約として必要十分な情報や考えが含まれているとともに、読み手が分かりやすいように、自分の言葉で書かれている。	内容伝達に支障をきたす誤りがない。
B	要約として概ね必要十分な情報や考えが含まれている。	内容伝達に支障をきたす誤りがほとんどない。
C	要約として必要十分な情報や考えが含まれていない。	内容伝達に支障をきたす誤りが2つ以上ある。

結果：

	内容	正確さ
A	9人(12.7%)	13人(18.3%)
B	35人(49.3%)	24人(33.8%)
C	27人(38.0%)	34人(47.9%)

※平均語数：12.6語

<分析と考察>

「内容」の観点で、A評価の生徒の割合は12.7%と、非常に少なかった。49.3%がB評価で、概要や要点をある程度掴むことはできているが、自分の言葉で分かりやすくアウトプットができないため、評価につながらない生徒が約半数いることが分かる。また平均語数は12.6語だが、白紙の生徒は2割を超え、書くことへの抵抗感を持っている生徒も多い。概要や要点を掴む指導や、それを効果的に自分の言葉で書いて伝える指導を通じて、書くことに対する自信を身に付ける必要がある。

リサーチ・クエスチョン

読んだことについて、自分の言葉で要約を書けるようにする力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・評価ルーブリックそれぞれの項目でA評価の生徒の割合が全体の7割以上になる。

・「書くことへの自信がついた」と答える生徒の割合が全体の7割以上になる。

改善のための手立て

○リーディングタスクを工夫すれば、概要や要点を的確に把握できるようになるだろう。

・段落ごとの要点をつかむための内容把握の選択問題に取り組みさせる。

- ・要点となるだろう箇所に下線を引き、ペアでその理由を確認したり、意見を交換したりする活動に取り組ませる。
- 言い換えの練習をすれば、自分の言葉で自然な表現で要約を書くことができるようになるだろう。
 - ・既習の表現を使って行うパラフレーズの練習に取り組ませる。
 - ・リスニングでの音声と、同じ意味の文を表す表現を探す活動に取り組ませる。
- 実際の要約を読んで分析する活動をすれば、必要な要素が分かり、適切に要約を書くことができるようになるだろう。
 - ・間違った情報や、個人的な意見などが含まれた要約の悪例を複数読み、改善点や理由を考える活動に取り組ませる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回英作文テスト（12月実施：受験者数71）

テスト内容と評価方法：第1回と同内容（15分間）

結果：

	内容		正確さ	
	5月	12月	5月	12月
A	9人(12.7%)	45人(63.4%)	13人(18.3%)	10人(14.1%)
B	35人(49.3%)	21人(29.6%)	24人(33.8%)	30人(42.3%)
C	27人(38.0%)	5人(7.0%)	34人(47.9%)	31人(43.7%)

※平均語数：72.2語

- ・第3回英語学習に関するアンケート調査（12月実施：回答者数72）

1. 英語で書くことへ自信が付いたと思いますか。

思う	まあ思う	あまり思わない	思わない
17人(23.6%)	43人(59.7%)	8人(11.1%)	4人(5.6%)

2. 読んだことや聞いたことの要点を捉えられるようになったと思いますか。

思う	まあ思う	あまり思わない	思わない
13人(18.1%)	50人(69.4%)	8人(11.1%)	1人(1.4%)

3. 自分の言葉でまとめることができるようになったと思いますか。

思う	まあ思う	あまり思わない	思わない
9人(12.5%)	39人(54.2%)	20人(27.8%)	4人(5.6%)

<分析と考察>

「内容」の項目で評価を取ることができた生徒は64.3%と、設定した7割の目標には届かなかったが、第1回の12.7%から大きく増加した。各生徒のデータについて検定（Wilcoxonの符号付順位検定）を行ったところ、統計学上有意な向上が認められた（ $p=0.00<0.05$ ）。一方、「正確さ」については伸長が見られず、目標を達成することができなかった。

第1回には2割を超えた白紙率は0%になり、平均語数も12.6語から72.2語に増加したことから、書くことへの抵抗感が少なくなったことがうかがえた。「一文一文にこだわって全体をとらえられなかったが読み方が変わった」「簡単な日本語から自分の知っている英語表現に変換できるようになった」など生徒のコメントからも手ごたえを感じられた。

生徒の意識についても、「書くことに自信がついた」と「(まあ)思う」と答えた生徒は83.3%となり、目標を達成することができた。しかし、「自分の言葉でまとめることができるようになった」と答えた生徒は7割弱にとどまり、短期間のうちには劇的な向上が難しいことが確認できた。

教師の変化

学習到達目標に基づいて、バックワードデザインでゴールタスクや活動を設定することの重要性を改めて意識することができた。実際に、生徒と目標を共有し、理論に裏打ちされた授業実践を行い、活動の目的を明確にすることで、自信をもって指導することができるようになった。またアンケートなどで生徒の声を聞きながら進めることで生徒の意識の変化や、もっと出来るようになりたいといった気持ちを実際に感じながら授業を組み立てるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回のアクション・リサーチにおいて最も反省すべきは、ループリックの評価基準である。書くことへの自信をつけてもらいたいとの思いから、英作文テストではとにかく多く書くことを生徒へプッシュした結果、「正確さ」の評価が下がってしまった。アクション・リサーチを進める中で、生徒が書くことへの抵抗感が少なくなり、多くの英文を書けるようになった一方で、改めて目標に基づいた評価基準の作成の難しさを痛感した。「できるようになってほしい」とことと評価基準が一致するようなループリックを作成したい。

まとめ・感想

1年間に渡って、自分で設定した目標に向かって授業を組み立てる経験は、大きな自信につながった。初めの内は、課題に対して生徒が苦しむ表情や戸惑っている姿を見ると、本当にこれでいいのかと迷うこともあったが、それすらも教材や導入の仕方を考え工夫するきっかけになった。また、他校で同じように頑張っている先生方の姿を見て話をする機会があったことは、大きな刺激となった。自分では思いつかない手法をいくつも知ることができ、早速自分の勤務校でもいくつか実践させていただいた。自分の授業を見ていただいた講師の先生方の客観的な目線からのアドバイスは貴重で、気付かされることばかりだった。今後も生徒や周りの先生方とのつながりを大切にしながら、目標を設定して授業を実践したいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

上山晋平. (2020). 『ニガテな生徒もどんどん書き出す！中学・高校英語ライティング指導』学陽書房.
上山晋平. (2022). 『英語トリオ・ディスカッション指導ガイドブック』明治図書.

令和5年度 英語教育中核教員育成研修

担当者 (50音順)

池田 知子 (いけだ ともこ)

出羽 由紀 (いずは ゆき)

ウォーリー, ジェイコブ (WHALLEY, Jacob)

ウールソン, クレア (WOOLSON, Claire)

大石 智子 (おおいし ともこ)

大槻 遼平 (おおつき りょうへい)

海鋒 拓也 (かいほこ たくや)

鎌田 淳司 (かまだ じゅんじ)

グエン, トア (NGUYEN, Thoa)

高取 純子 (たかとり じゅんこ)

高野 真依 (たかの まい)

パリセ, ピーター (PARISE, Peter)

プラム, ケネディ (PULLUM, Kennedy)

村越 みどり (むらこし みどり)

令和5年度 英語教育中核教員育成研修

授業改善プロジェクト 報告書

—アクション・リサーチによる高等学校英語授業での実践研究—

発行日 令和6年3月18日

編集 神奈川県立総合教育センター

(担当) 高取 純子

発行 神奈川県立総合教育センター

藤沢市善行7-1-1

TEL 0466(81)1635
